

# 才ノ峪遺跡

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第18集

1985.3

津山市教育委員会

才ノ峠遺跡

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第18集

1985.3

津山市教育委員会

## 序

津山市は、岡山県北部吉井川中流域に位置し、和同六年（713）備前国より分離された美作國の国府が置かれて以来、美作地方の政治的、経済的中心としての位置を永らく保ってきました。

市内各所には、その自然環境の良好なことも手伝って、弥生時代以降の先人の足跡が数多く残され、それらの保護、保存対策については、市民の深い理解の下に、現在では教育委員会の社会教育課が主としてその任にあたっております。

近年は、市内各所で種々の土木事業がおこされ、このため地下に埋もれた遺跡の保護、保存対策が緊急かつ重要な課題となっております。

地下に埋もれた遺跡は、その性質上把握が困難なことも多く、本遺跡も、ゴルフ練習場の造成計画書の提出があって、現地を事前に踏査した結果発見されたもので、事業実施に先立ち緊急に調査したものです。

本書は、工事区域で発見された4基の古墳のうち2基の小古墳と、調査過程で古墳の下から発見された弥生時代後期の長方形台状墓の発掘調査記録です。

これら重要な遺跡の調査としては、数々の不確も存在するかとも思いますが、ここにその結果について、早急に報告するものであります。活用いただければ幸甚に存じます。

末筆ながら、2基の古墳の保存に同意され、調査の実施に種々の御援助をいただいた事業主北奥勉氏と、有形、無形の御指導、御援助をいただいた各位に、深く感謝の意を表したいと思います。

昭和60年3月31日

津山市教育委員会

教育長 福島祐一

## 例　　言

1. 本書は、昭和59年8月23日から10月18日まで津山市教育委員会が実施したゴルフ練習場造成計画に伴う才ノ崎2号墳、弥生長方形台状墓他の発掘調査報告書である。対象地区の地番は、岡山県津山市植字才ノ崎335-1番地他である。
2. 発掘調査ならびに報告書作成に要した諸経費については、原則として事業者負担としたが、不足額の若干については、津山市費をあてた。調査にあたっては、事業主北奥勉氏、横地区町内会長寺坂健一郎氏他の援助を得た。記して感謝の意を表したい。
3. 本書の執筆は、第1章及び第3章1・①・C・須恵器を濱哲夫が担当した他、中山俊紀があたった。
4. 遺構の実測は、主として中山が実施したが、濱哲夫、安川豊史、行田裕美、杉山紀子、飯田和江他の協力を得た。
5. 遺物の実測、製図は、須恵器を濱が実施した他中山がすべてを作成した。
6. 本書に使用したレベル高は、すべて海拔絶対高である。方位は磁北方位を用いた。なお、磁針方位は西偏約 $6^{\circ}40'$ である。
7. 出土遺物、図面は、津山市二宮の埋蔵文化財整理事務所に保管している。

## 本文目次

第1章 はじめに	頁
1. 発掘調査にいたる経過	1
2. 遺跡の位置と環境	2
第2章 発掘調査の概要	
1. 発掘調査の経過	6
2. 遺構の概要	8
第3章 遺構及び遺物	
1. オノ崎古墳群の調査	10
①2号墳の調査	10
a 中心埋葬	12
b 周溝内埋葬	12
c 出土遺物	13
須恵器	13
土師器	15
小玉	16
②5号墳の調査	17
③3号墳塚の調査	17
2. 長方形台状墓の調査	18
①オノ崎長方形台状墓	18
a 木棺墓	20
b 出土遺物	25
弥生土器	25
3. 中世土器	29
第4章 結語	
1. 美作地方弥生時代墓制の特性と問題	30
はじめに	30
家族墓の構成	30
集団墓	32
オノ崎長方形台状墓	33
地域共同体の構成	34

## 挿 図 目 次

	頁
Fig. 1. 中国地方要図.....	1
Fig. 2. 才ノ嶠遺跡周辺の主要遺跡分布図 (1 : 25,000) .....	3
Fig. 3. 才ノ嶠遺跡周辺地形図 (縮尺 1 : 4,000) .....	5
Fig. 4. 才ノ嶠古墳群分布図 (縮尺 1 : 300) .....	7
Fig. 5. 才ノ嶠長方形台状墓位置図 (縮尺 1 : 300) .....	9
Fig. 6. 才ノ嶠 2 号墳平面図及び断面図 (縮尺 1 : 100) .....	11
Fig. 7. 中心埋葬平面図、断面図 (縮尺 1 : 30) .....	12
Fig. 8. 周溝内埋葬平面図、断面図 (縮尺 1 : 30) .....	12
Fig. 9. 須恵器 (縮尺 1 : 3) .....	14
Fig. 10. 土師器 (縮尺 1 : 3) .....	16
Fig. 11. 小玉 (縮尺 1 : 1) .....	16
Fig. 12. 5 号墳平面図、断面図 (縮尺 1 : 200) .....	17
Fig. 13. 3 号墳埴土層断面図 (縮尺 1 : 40) .....	17
Fig. 14. 長方形台状墓全体図 (縮尺 1 : 150) .....	19
Fig. 15. 1、2 号木棺墓平面図、断面図 (縮尺 1 : 30) .....	21
Fig. 16. 3、6 号木棺墓平面図、断面図 (縮尺 1 : 30) .....	23
Fig. 17. 5、7、8 号木棺墓平面図、断面図 (縮尺 1 : 30) .....	24
Fig. 18. 弥生土器 (縮尺 1 : 4) .....	26
Fig. 19. 弥生土器 (縮尺 1 : 4) .....	27
Fig. 20. 中世土器 (縮尺 1 : 3) .....	29
Fig. 21. 美作地方の墓地遺跡.....	31
Fig. 22. 墓地遺跡、構造モデル類型表.....	32

## 表 目 次

表 1. 才ノ嶠遺跡遺構一覧表.....	8
----------------------	---

## 写 真 図 版 目 次

PL. 1 1, 調査前 2, 2 号墳南周溝部 3, 2 号墳 4 区

4, 2 号墳東西トレンチ西部「葺石」

- PL. 2 5, 2号墳中心主体 6, 2号墳中心主体 7, 2号墳周溝内埋葬  
8, 2号墳周溝内埋葬床ピット須恵器出土状況 9, 5号墳
- PL. 3 10, 長方形台状墓全景 11, 長方形台状墓底土断面 12, 1号木棺墓  
13, 1号木棺墓
- PL. 4 14, 6号木棺墓 15, 2号、3号木棺墓 16, 7号木棺墓  
17, 2号、3号木棺墓 18, 8号木棺墓
- PL. 5 長方形台状墓出土弥生土器文様各種
- PL. 6 長方形台状墓出土弥生土器、2号墳出土土師器
- PL. 7 2号墳周溝内埋葬出土須恵器
- PL. 8 2号墳出土土器（須恵器、土師器、勝間田焼、土師質坏・小皿）

#### 関係文献

- 1952……a 近藤義郎 「佐良山古墳群の研究」 津山市 1952
- 1957……a 近藤義郎、渋谷泰彦編「津山弥生住居址群の研究」 津山市・津山郷土館 1957
- 1959……a 近藤義郎 「共同体と単位集団」『考古学研究第6卷1号』 考古学研究会 1959  
b 柳原恭平 「美作における弥生時代の墳墓について」『古代学研究21、22合併号』古代学研究会 1959
- 1963……a 河本清 「津山市続山作陽高等学校 弥生時代窓穴群」『古代吉備第5集』 1963
- 1966……a 近藤義郎、春成秀嗣「岡山県津山市上原遺跡」『日本考古学年報19』 日本考古学協会 1966
- 1967……a 近藤義郎、春成秀嗣「埴輪の起源」『考古学研究第13巻3号』 考古学研究会 1967
- 1972……a 今井亮 「原始古代」『津山市史第1巻』 津山市 1972
- 1973……a 橋本惣司、下沢公明「押入西遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3』  
井上弘、柳瀬昭彦 岡山県教育委員会 1973
- b 河本清、橋本惣司「野介遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3』 岡山県教育委員会 1973
- c 栗野克巳、山崎康平「二宮大成」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告6』 岡山県教育委員会 1973
- d 山中溝進、新東晃一「下市遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3』 岡山県教育委員会 1974
- e 名越勉、甲斐忠彦「スタンプ施文土器の新例」『考古学雑誌第58巻4号』 日本考古学会 1973
- f 芝田雅昭「倉吉市服部遺跡発掘調査報告(遺物編)」 倉吉市教育委員会 1973
- 1974……a 石野博信、村上敏揚「播磨・吉福遺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査集報第2集』  
松下謙 兵庫県教育委員会 1974
- b 河本清 「狐塚遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第2集』 津山市教育委員会 1974
- 1975……a 河本清、橋本惣司「天神原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告7』 岡山市教育委員会 1975  
下沢公明、柳瀬昭彦
- b 松本和男「久世の夜明け」『久世町史』 久世町教育委員会 1975
- 1976……a 猪塚省藏 「吉備型壺台論(上)(下)」『眞説4・5』 共同体研究会 1976
- 1977……a 栗野克巳、岡本亮久「下道山遺跡緊急発掘調査概報」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告17』 1977  
b 近藤義郎 「古墳以前の墳丘墓一橋築遺跡をめぐってー」『岡山大学法文学部学術紀要第37号』 岡山大学法文学部 1977

- 1978 a 河本清、 植瀬昭彦「沼E遺跡」「岡山県埋蔵文化財報告9」 岡山県教育委員会 1978
- b 萩原克人 「古墳の成立」「光は西から」 文一総合出版 1978
- c 奥和之、 山廢康平「中山遺跡」 岡山県落合町教育委員会 1978
- 横本聰司
- 1979 a 高畠知功、 二宮治大「二宮遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告28」 岡山県教育委員会 1979
- b 村上幸雄、 横本聰司「稼山遺跡I」「稼山遺跡II」久末開発事業に伴う文化財調査委員会 1979, 1980
- 1980 a 真山宏幸、 森下哲哉「上木積遺跡発掘調査報告Ⅱ」 倉吉市教育委員会 1980
- 1981 a 宇垣匡雅 「特殊器台形土器・特殊蓋形土器に関する型式学的研究」「考古学研究第27卷4号」 考古学研究会 1981
- b 行田裕美 「日上和田古墳」「津山市埋蔵文化財発掘調査報告第6集」 津山市教育委員会 1981
- c 中山俊紀、 行田裕美「沼E遺跡Ⅱ」「津山市埋蔵文化財発掘調査報告第8集」津山市教育委員会 1981
- d 安川豊史 「東藏坊遺跡B地区」「津山市埋蔵文化財発掘調査報告第9集」津山市教育委員会 1981
- e 河本清、 中山俊紀「大田十二社遺跡」「津山市埋蔵文化財発掘調査報告第10集」 安川豊史、 行田裕美 津山市教育委員会 1981
- 1982 a 中山俊紀 「京免・竹ノ下遺跡」「津山市埋蔵文化財発掘調査報告第11集」津山市教育委員会 1982
- 1983 a 西川宏 「吉備」「歴史公論3(古代の日本海文化)」 雄山閣 1983
- b 近藤義郎 「前方後円墳の時代」「岩波歴史叢書」 岩波書店 1983
- c 高橋謙 「二世紀代における共同体の変容」「岡山県史研究第5号」 岡山県史編纂室 1983
- d 行田裕美 「築瀬古墳群」「津山市埋蔵文化財発掘調査報告第13集」 津山市教育委員会 1983
- 1984 a 近藤義郎 「吉備とは何か」「えとのす24号」 新日本教育図書 1984
- b 江見正己 「弥生土器」「えとのす24号」 新日本教育図書 1984
- c 中山俊紀 「津山盆地の弥生時代」「えとのす24号」 新日本教育図書 1984
- d 近藤義郎 「古墳の隆盛と衰退」「特殊器台と弥生墳丘墓」「えとのす25号」 新日本教育図書 1984
- e 土居徹也編「竹田墳墓群」「竹田遺跡発掘調査報告第1集」 銀野町教育委員会 1984  
 (付 近藤義郎 四隅突出型弥生墳丘墓二題)
- f 藤山憲司 「単位集団の居住領域」「考古学研究第31卷第2号」 考古学研究会 1984
- g 行田裕美 「ビシャコ谷遺跡」「津山市埋蔵文化財発掘調査報告第16集」 津山市教育委員会 1984
- h 安川豊史 「美作国府跡発掘調査報告」「津山市埋蔵文化財発掘調査報告」津山市教育委員会 1984
- i 高橋謙 「組籠文の裏面と特殊器台」「岡山県立博物館研究報告5」 岡山県立博物館 1984
- j 中山俊紀 「弥生土器余話」「郷土館案内第3号」 津山市立郷土館 1984

# 第1章 はじめに

## 1. 発掘調査にいたる経過

津山市総社 1,229番地、北奥勉氏から岡山県知事宛に津山市字才ノ崎 335—1 番地他22筆（面積18,929m<sup>2</sup>）にかかる都市計画法第29条に基づく開発申請書が昭和59年7月13日付けで提出されたので、同7月31日、当委員会職員が開発用地の分布調査を実施したところ、新たに4基の古墳を確認した。ただちに、申請者と協議を行い、下記事項についての合意をみた。

- (1). 才ノ崎1号墳、3号墳、4号墳については、現状で保存する。
- (2). 才ノ崎2号墳については、申請者の経費負担のもとに、当委員会が発掘調査を実施する。

上の合意に基づき、当委員会と北奥氏との二者で、開発事業の事業施行に伴う文化財保護に関する覚書を8月10日付けで締結し、8月17日には、北奥氏から文化庁長官宛に文化財保護法第57条の2に基づく埋蔵文化財発掘届書が提出され、さらに同日には、開発用地のうち、保存地区と造成地区との線引きを行った。

当委員会では、上の覚書に基づき、調査準備を進め、8月25日付け文書で文化庁長官に文化財保護法第98条の2に基づく発掘調査通知を行うとともに、8月23日から才ノ崎古墳群の地形測量に着手し、28日からは発掘を開始した。調査は先の造成地区内に含まれる才ノ崎2号墳と3号墳北墳端部を対象とした。なお、測量の段階で当初4号墳としたものは、自然地形のくず



Fig. 1 中国地方要図 (▲印 才ノ崎遺跡)

れであることが判明した。

発掘調査の組織は次のとおりである。

調査主体者	津山市教育委員会 教育長 福島祐一
調査担当者	津山市教育委員会社会教育課主事 中山俊紀
調査援助	濱 哲夫、安川豊史、安藤 治、杉山紀子、飯田和江
調査作業員	多胡宏允、多胡 勤、津村 邇、神田種子、前原英子
遺物整理	中山俊紀、濱 哲夫、日暮月子、杉山紀子、飯田和江

## 2. 遺跡の立地と環境

中国地方は、南に瀬戸内海、北に日本海に挟まれ、そのやや北よりに標高1,711mの大山を首座とする中国山地が東西に長く横たわっている。津山市が位置する美作地方は、その東辺、中国山地と標高500m前後の吉備高原との接觸部に立地する(Fig. 1)。その山がちな地形の中に、中国山地を源とする吉井、旭の二大河川とその支流に沿って、津山盆地を最大として、勝山、蒜山など幾つかの小盆地が点在する。このうち、津山盆地は、東は英田郡作東町江見、西は真庭郡藩合町迫分を境とする東西約40km、南北約10数kmに及ぶおむね標高100~300mの内陸地帯を形成している。その中央北辺部に、標高791mの山形仙から、吉井川の支流加茂川東岸に沿って、南に派生する丘陵群がある。才ノ崎遺跡は、この丘陵群のほぼ中央、加茂川の東約500mの標高175mの丘頂に立地する(Fig. 2)。この周辺では、才ノ崎遺跡の位置する丘陵を中心として、四方に幾筋もの小丘陵が派生し、細長い谷とともに複雑な地形を呈している(Fig. 3)。遺跡からは、四隅をよく見わたせるが、とりわけ北側の横の平地への眺望がすぐれ、遺跡を形成した集団の生産基盤が那辺に存したかを暗示している。遺跡の行政区画は、岡山県津山市橋字才ノ崎 335番地の1である。

才ノ崎遺跡の位置する加茂川両岸一帯には、弥生時代から古墳時代にかけての多数の遺跡が分布している。才ノ崎遺跡の北々西約1.5kmの加茂川右岸の地に、ここ10年来、浄水場や工業団地が建設されてきたので、それに伴う発掘調査が進展している。調査された遺跡を中心に、この地域の主な遺跡について概観しておく。まず、弥生時代では、齋込遺跡と東藏坊遺跡が調査されている。齋込遺跡は、中期後葉の集落跡で、20数棟の竪穴住居址が検出されている。1976~78年、草加部工業団地埋蔵文化財発掘調査委員会調査。東藏坊遺跡は、A地区で中期後葉から後期末にかけての16棟の竪穴住居址、B地区からは、中期後葉の4棟の竪穴住居址、1棟の高床倉庫址などが検出された。A地区は、1973年津山市教育委員会調査。<sup>①</sup>

古墳時代では、浄水場や工業団地に伴う古墳の調査例が多い。緑山A1号墳は、7世紀頃の横穴式石室墳である。1983年、津山市教育委員会調査。篠瀬古墳群は、6世紀後半頃の円墳3基からなる。1号墳は径7.6m、高1.4m、埋葬施設は竪穴式石室らしい。2号墳は径9m、

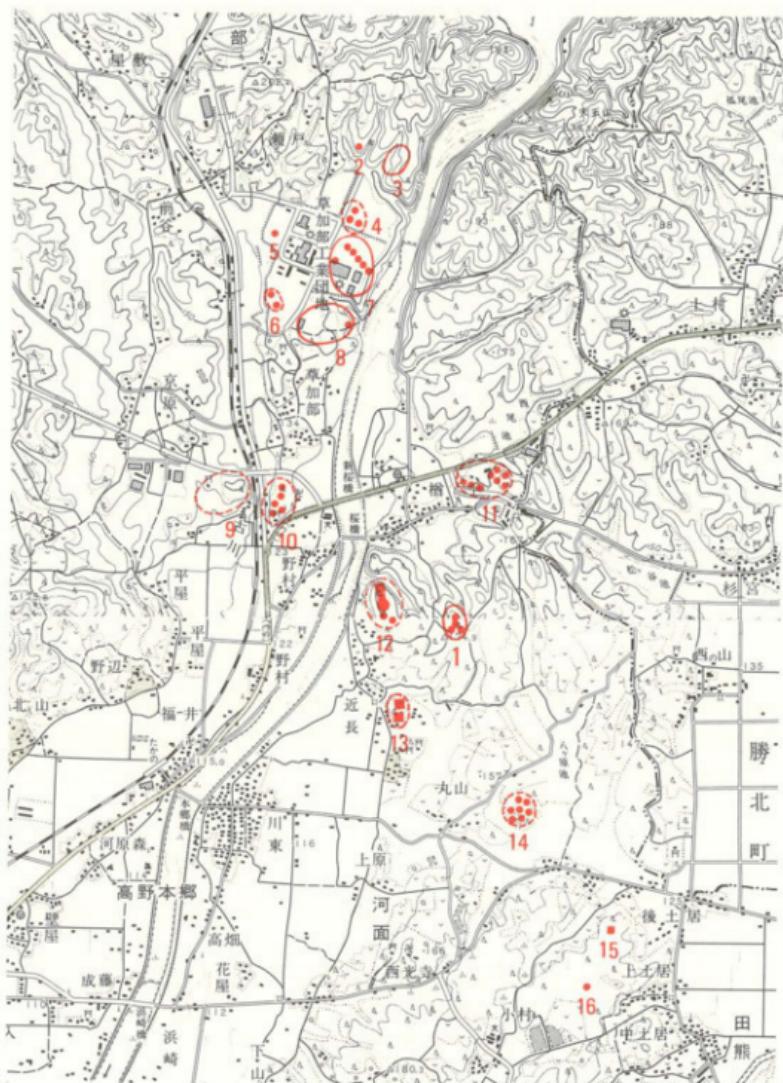


Fig.2 オシオ遺跡周辺の主要遺跡分布図 (1:25,000)

国土地理院発行 1/25,000地形図「東山東部」及び「柄」を複製

高1m、埋葬施設は木棺直葬など4主体からなる。3号墳は径約12mで、埋葬施設は横穴式石室である。ニレノ木南古墳は、6世紀前半頃の木棺直葬の円墳である。1976年、津山市教育委員会調査。丸尾古墳群は、2基の円墳であるが、1978年、破壊を受けた。1号墳は木棺直葬、2号墳は横穴式石室と推定される。館込古墳群は、6世紀後半頃から7世紀頃にかけての6基の円墳から構成される。埋葬施設は竪穴式石室と横穴式石室の両者がある。東蔵坊1号墳は、径約8mの円墳で、横穴式石室を埋葬施設とする。以上的一群から少し南に離れて、圓鉄因美線をはさんだ左右に2群の群集墳が築かれている。西に位置する狐塚古墳群は、9基の円墳からなる。うち2基は径約20mで、他は径約10mの小墳である。東の片山古墳群は、5基の円墳である。両群とも未調査。五反田古墳群は、国道53号線に南接する丘陵上にある。6基の円墳と2基の方墳からなる。未調査。才ノ崎遺跡から西北に延びる丘陵上に、市指定史跡近長四ツ塚古墳群が立地する。1号墳は丘陵突端にある方墳で、1辺15m、高2.5m。2号墳は1号墳に南接する前方後円墳で、前方部を北に向ける。全長45m、後円部径25m、同高5m、前方部幅15m、同高2.5mを測る。3号墳は、2号墳の南5mにある円墳で、径15m、高2.5m。4号墳は3号墳の南30mにある円墳で、径10m、高1.5m。いずれも未調査である。四ツ塚古墳群の南約500mにある夫婦塚古墳群は、南北に並ぶ2基の中型方墳である。どちらも一辺約20m、高約3.5m。未調査。大池ノ西古墳群は、八ヶ原池西南の丘陵上にある7基の円墳である。いずれも径10m前後、高1m前後の小墳である。未調査。上土居古墳は、田熊の小盆地を見下ろす丘陵突端にある方墳。一辺約7m、高約1.5m。未調査。その南の山頂にある愛宕神社古は、径約10m、高約1mの円墳である。未調査。加茂川右岸の標高約200mの丘陵南斜面に、7世紀前半頃の製鉄遺跡である綠山遺跡がある。1983年から84年までの当委員会の調査により、2基の製鉄炉と9基の製炭窯が検出された。<sup>④</sup>

## (注)

- ① 安川豊史『東蔵坊遺跡B地区発掘調査報告』(津山市埋蔵文化財発掘調査報告第9集) 津山市教育委員会 1981年
- ② 行田裕美『葉瀬古墳群』(津山市埋蔵文化財発掘調査報告第13集) 津山市教育委員会 1983年
- ③ 安川豊史『東蔵坊遺跡B地区発掘調査報告』(前掲)
- ④ 中山俊紀『岡山県津山市綠山遺跡』『季刊考古学』第8号 雄山閣出版 1984年



Fig.3 才ノ崎遺跡周辺地形図（縮尺 1:4,000）

## 第2章 発掘調査の概要

### 1. 発掘調査の経過

オノ嶠遺跡の調査は、当面保存と決った1・3号墳を除き、2号墳1基を対象に期間1ヶ月の予定で昭和59年8月23日から着手した。現地は元松山であったが、工事計画にともない調査時にはすべて立木は伐開されていた。手始めに、古墳群の地形測量を縮尺100分の1、20cmセンターで文化係職員の応援を得て実施した。この際使用した水準高原点は、隣接丘陵上の三角点で海拔174.9mである。

地形測量により、2号墳周辺の異常な地形が注意を引いたし、2号墳東側で弥生土器1片を採集したが、この事実は、2号墳が弥生時代の小規模な墳丘墓であることを疑がわせたのみで、この異常が長方形の台状墓と後期小円墳の折り重なりによって生みだされているなどとは、予測だにできなかった。この結果、2号墳の調査にあたり多くの試行錯誤がくりかえされた。

作業員の参加を得、倒された木のかたずけと、十文字のトレチを堀り始めたのは8月28日以降で、箱式棺の存在は知られていたが、他に埋葬のあることを予測し、トレチは墳端を確認する程度にとどめた。

墳端確認トレチの調査結果は、通常の古墳とは異なり端線は土層上極めてあいまいで、(Fig. 6) a側、d側で葺石らしい掌大の石若干が確認され、上層上の区分と概ね一致した以外、b側の墳端線はきわめて不明瞭で、墳端と考えられる部分よりかなり内側に入って、不可解な落ち込み線が認められた。c側は、削平が激しく本来の墳端線はまったく確認できなかった。

このため葺石状の小礫を目やすに墳端を確認する作業に入ったが、「葺石」は根脚的なもので、4区については墳端確認は成功したものの、その他の区では端線は不明瞭なものであった。

これらの不可解な原因が解明されたのは、古墳の立ち割りをおこなった最終局面となってからである。古墳たち割り作業によって、古墳下に木棺墓の存在が認められ、その掘り方は從来古墳盛土と考えていた上層腐植土から切り込まれていたのである。またb側墳端部の落ち込み線も、弥生木棺墓掘り方線であることが明瞭となった。つまり、古墳盛土と考えていた上層とともに弥生時代の長方形台状墓の盛り上で、古墳は台状墓盛り土を削りさらにその上に盛り上げて築造したことが明瞭となったのである。

古墳下の遺構について確認できたのは、調査終了予定の9月末で、弥生墓が広範囲に存在する可能性もあり、工事者の了解を得て20日期間を延長し、重機によって広範囲な表土剥ぎを10月初めにおこなった。この結果、当初の地形の異常部分に沿って長辺約16m、短辺約10mの弥生台状墓がはじめてその姿をあらわしたのである。調査終了は、10月18日である。



Fig.4 才ノ崎古墳群分布図（調査前）（縮尺1：300）

## 2. 遺構の概要

確認された4基の古墳は、ともに直径10m内の小円墳で、丘陵尾根上部にそれぞれ接近して群在する小規模な初期群集墳のあり方を示している。調査された2号墳は、周溝をもつ直径約6mの小円墳で、埋葬主体は箱式棺であった。墳斜面には、拳大ないしは親指大の小礫が葺かれていたが、葺石とは名ばかりの痕跡的なもので、全周していたかどうか不明である。周溝内に土壇幕1基があり、須恵器8点が副葬されていたが、その位置及び所属時期あるいは土層堆積状況からみて、本墳に共伴するものとみてよい。

古墳東半は段状に削平を受け、土体も大半が破壊されていて、削平部両側方に人頭大の石が散乱していること、これらの石群中より中世土器が発見されることからみて、かつて墳頂部に祠状の施設が存在していて、信仰の対象になっていたことが考えられる。

台状墓は、長辺16m、短辺10m程度の規模を有し、ほぼ長方形にきちんと整形されていたと考えられる。古墳に残存する台状墓山地表面からみて、本来ほぼ上面は水平に整えられていたものであろう。四隅はそれぞれやや貼出している風に見てとれるが、墳裾ないしは墳斜面に石材を用いたという痕跡は一切ない。墳丘外の北側平坦面では、遺物・遺構の検出はなかったがこの部分は自然地形を改変したものであることは明らかで、台状墓に伴うものとみれる。

計7基検出された木棺墓相互の切合ではなく、墳区画に整合した東西、南北方向の直交型配置をとっている。墓擴規模は一般に大形で、長辺規模は2.7~2.9mのものがある。

棺の組み立てにあたって、側板と墓壁壁間に地山疊をつめこみ固定するのが通例で、1号、3号墓では人頭大の大きめの石材を用い、6号墓では拳大の石をつめこむといった差異がある。前者は箱式棺、後者は竪穴式石室風である。

木棺墓のうち6基は小口穴をもち、1基はそれをもたない。竹ノ下遺跡の木棺墓でも同様な差があり、この地域の弥生墓の一般的なあり方に通ずるかもしれない。

墓域上での祭祀土器の使用は認められるが、副葬品は皆無で、このことも当地域の弥生墓の一般的なありかたに共通する。

遺構名	種別	規 模	時 期	図、図版	備 考
1号墳	円 墳	約9 m	?	Fig.4 PL1-1	多頭、空窓穴6個の痛みあり 道端により南側削削
2号墳	円 墳	約6 m	6世紀初頭 PL1~PL2	子母指穴式、土師器、小玉 周溝内須恵器1片、須恵器8 点	
3号墳	円 墳	約9 m	?	Fig.4 PL1-1	未掲
5号墳	円 墳	約5 m	?	Fig.12 PL2-9	地丘なく周溝のみ残存 周溝内須恵器1片
台状墓	長方形台状	16×10m	弥生後期 PL3-10	Fig.14	周溝状の形状が認められる
1号墓	木棺墓	2.7×1.3m	弥生後期 PL3-12,13	Fig.15	小口穴有、棺腹有
2号墓	木棺墓	2.5×1 m	弥生後期 PL4-15,17	Fig.15	小口穴有
3号墓	木棺墓	2.3×1 m	弥生後期 PL4-15,17	Fig.16	小口穴有、棺腹有
5号墓	木棺墓	1.3×0.8m	弥生後期 PL4-17	Fig.17	木棺蓋としたが、土槽側面 きわめて団塊なもの
6号墓	木棺墓	2.4×1 m	弥生後期 PL4-14	Fig.16	小口穴有、棺腹有
7号墓	木棺墓	2.9×1.1m	弥生後期 PL4-16	Fig.17	小口穴有
8号墓	木棺墓	2.3×0.8m	弥生後期 PL4-18	Fig.17	小口穴無

表1 オノ崎遺跡遺構一覧表



Fig.5 才ノ嶋長方形台状墓位図（縮尺1：300）

## 第3章 遺構及び遺物

### 1. 才ノ崎古墳群の調査

#### ① 2号墳の調査

2号墳は、古墳群の存在する北に延びる小丘陵基部最高所で本來比較的平坦な部分に位置する。先行する東西方向に長輪をとる長方形の弥生台状墓の西北部に位置し、台状墓残存地表面を基底面として円形に整形、盛り上げをおこない築成している。調査時の状況は東半の変形が著しかった。

古墳残存盛土は一層で、もっとも厚い部分でも30cmばかりを残すのみである。主体の箱式石棺の大半が消失し、一部石材を残し床面近くまで露呈していたこと、周溝部を覆って古墳盛土と同質の土が厚く堆積していたことは築造後の盛土の流出が激しかったことを物語っている。

周溝は、幅1.5m～2mほどで、皿状の浅い断面形態を呈する。北側部分を除いて、馬蹄形状にはぼ墳裾にそって巡らされている。

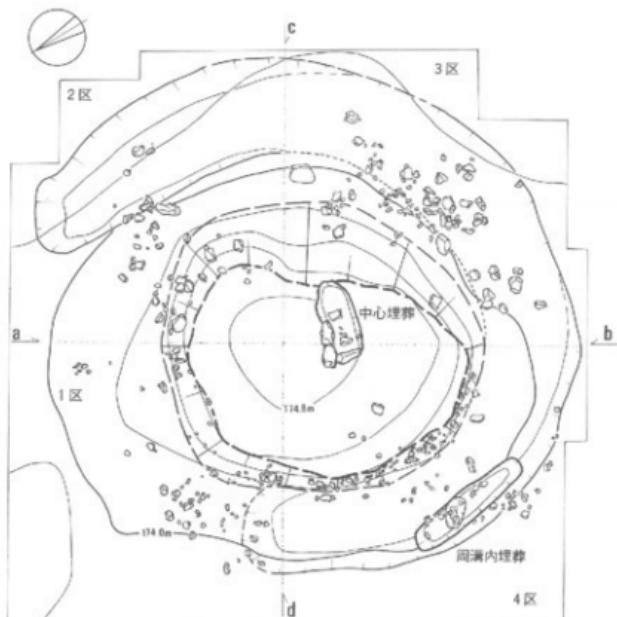
周溝底は、西部分が高く南、東部分へと序々に下降している。西部分と東部分の周溝高底差は、約50cm程度である。周溝埋土は、西・南方向では古墳盛土と同質の黄色土で構成されているが、もっとも深い東部分では最下層に有機質土壤が堆積していた。

周溝埋土中には、弥生土器片が比較的多く含まれており、土師器甕2点、上層部で中世のものと考えられる糸切底の土師甕小皿数点が発見された。

1、4区では、墳斜面に墳裾部から削平により形成された上面傾斜変換線部分まで蓋石の残存が認められたが、用いられる石材は大きいもので拳大で、親指大のものが多く含まれており、大半は、地山中に含まれる転石を用いたもので石質も多種である。残存状況も不均質で、本来・巡していたものかどうか不明である。

主体埋葬と考えられる箱式石棺は、復元墳丘の中央部にほぼ位置し、20度ばかり北偏して主軸を東西方向においている。これ以外の埋葬の存在を想定して、プランによる検出、最終的には断ち割りによる検出をおこなったが、埋葬施設と考えられるものは確認されなかった。

周溝西部分やや外よりに主軸を周溝に沿わせて土礫幕一基が発見された。位置及び副葬品の年代観からみて、本古墳に伴うものとみてよいだろう。墳丘の東半部分の削平は、段状に整形されており、削平箇所から周溝部をおおって、人頭大の石材が多数発見されたが、いづれも周溝底面からは大きく浮いた状態で発見されており、本古墳に直接関係するものではない。この部分で、中世のものと考えられる土師甕小皿が数点発見されており、これらの石は古墳削平時に動かされたものであろう。



0 3m

Fig.6 才ノ塔 2号墳平面図及び断面図（縮尺 1:100）

## a 中心埋葬

箱式石棺で、南半及び東部分の削平が激しく、調査時には本来存在していたであろう石材の大半は消失しており、東部分の床面はすでに露出していた。

推定復元規模は、長軸約1.7 m・幅約0.7 mである。

粗石は、西妻の一石と北側石二個のみ残存し、角の側石が緑色片岩の割石である他転石である。棺底には、

緑色片岩の扁平な割石二板が敷かれ、それより小ぶりの石が同レベルに数個おかれていた。床面よりやや浮いて、土師器小形壺1点、東側数石部でガラス小玉17点が発見された。小玉の大半は、敷石上面より深い位置で発見されたが、これは根のかく乱によるものであろう。

## b 周溝内埋葬

長軸2.4 m・幅0.5 mの狭長な土壙墓で、断面形態は舟底形を呈す。東側壁にそって床面に須恵器杯蓋身三組がバラバラに副葬されていた。

中央部やや北よりに、土壙底からさらに長方形状の落ち込みがあって、この中に須恵器広口壺、短頸壺各1点及び小兒頭大の転石1個がおさまっていた。

この土壤は、埋葬に際しては埋められていたと考えられるが、転石は土壙底面につき、上部は墓壙底をはるかに突き破っている。

2号墳に伴う埋葬であることはほぼ確かであるが、周溝内埋葬の土壤墓に、威信財としての古い時期の須恵器が多数副葬されているという事実は、主体埋葬と墳丘外埋葬の意味の差を考慮する上で、一つの検討材料となるだろう。

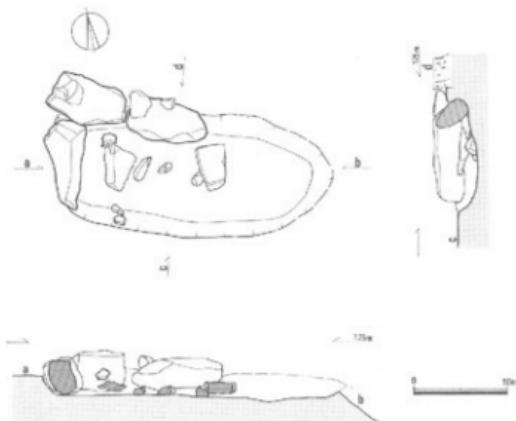


Fig.7 中心埋葬平面図、断面図（縮尺1:30）

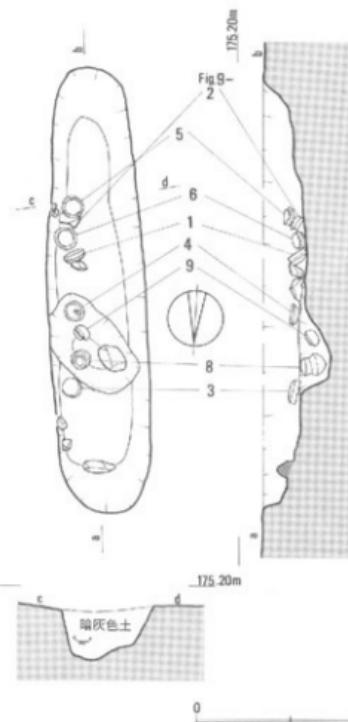


Fig.8 周溝内埋葬平面図、断面図（縮尺1:30）

### c 出土遺物

**須恵器** 須恵器は2号墳周溝内土壤幕などから11個体出土した。

1～3は、蓋杯蓋である。1は口径12.2cm、器高5.4cm。天井部は丸く、体部はほぼ直立する。口縁端部は角張り、端面に内傾する明瞭な段をもつ。天井部と体部を画する稜は突出する。天井部外側の約4分の3は、時計回りの回転ヘラ削り、天井部下端から体部にかけてと内面全体は回転ナデ調整を施す。色調は灰色で、胎土に1～2mm位の砂粒を多く含み、焼成やや軟質。2は口径12.8cm、器高5.3cm。器形、成形技法等は1とほぼ同じである。口縁端部が心持ち外反する。色調は淡灰色、焼成軟質。3は口径11.6cm、器高4.2cm。1・2より小型である。天井部はやや扁平で、体部はほぼ直立する。口縁端部は角張り、端面に内傾する明瞭な段を有する。天井部と体部を画する稜は突出しない。天井部外側の約3分の2は、逆時計回りの回転ヘラ削り、他は回転ナデ調整である。色調は灰色で、胎土に0.5～1mm位の砂粒を多く含み、焼成良好。

4～6は蓋杯身である。4は口径10.6cm、器高5.7cm。底部は丸く、たりあがりはやや内傾する。口縁端部は角張り、端面に内傾する明瞭な段を有する。受部はほぼ水平に突出し、端部は丸い。底部外側は時計回りの回転ヘラ削り、体部とちあがり外面は回転ナデ、内面は回転ナデだが、底部の一部に不定方向ナデがみられる。色調は淡灰色、胎土に1～4mm位の砂粒を多く含み、焼成軟質。5は口径10.6cm、器高5.2cm。器形、成形技法等は4とほぼ同じだが、底部がやや扁平となる。底部内面の不定方向ナデはない。色調灰色、胎土に1mm位の砂粒を多く含み、焼成良好。6は口径10.3cm、器高4.6cm。底部はやや扁平で、たりあがりは外湾しながら内側する。口縁端部は角張り、端面にわずかな段を有する。受部はほぼ水平に突出し、端部は丸い。底部外側は時計回りの回転ヘラ削り、他は回転ナデ、底部内面の一部に不定方向のナデがみられる。色調淡灰色、胎土に0.5mm位の砂粒を多く含み、焼成良好。以上の蓋杯は、1と4、2と5、3と6がそれぞれ対になるものと思われる。

7は広口壺と推定されるが、龜の可能性もある。口頭部の2破片と肩部の1破片からなる。復元口径約12cm。口頭部は大きく外反し、口縁部外側に2条の凹線が巡る。口縁部内面は外湾し、端部内面に段を有する。頭部に17条のクシ描き波状文をもつ。体部は球形に復元され、現存部分に2条の波状文をもつ。現存部分の内面全部に灰がかぶる。調整手法は内外面とも回転ナデ。色調黒灰色、胎土はよく精選され、焼成堅緻。8は直口壺。口径9.3cm、体部最大径12.4cm、器高13.0cm。底部は丸く、体部は球形で、肩はあまり張らない。頭部はやや外反し、口縁端部外側の約2分の1に1条の沈線がめぐる。端部上面には稜を有する。外面の約3分の2と内面口頭部、底部に暗褐色の自然釉がかかる。底から約5cm上のところに粘土の継ぎ目痕がある。体部外側の下半は不定方向のヘラ削り、内面下半は指頭圧痕、肩部外側には幅15cmのハケ口帯、体部上半と口頭部は内外面とも回転ナデである。色調灰褐色、胎土に0.5mmの砂粒を多く含み、焼成良好。9は短頸壺。口径7.3cm、体部最大径9.8cm、器高5.6cm。体・底部

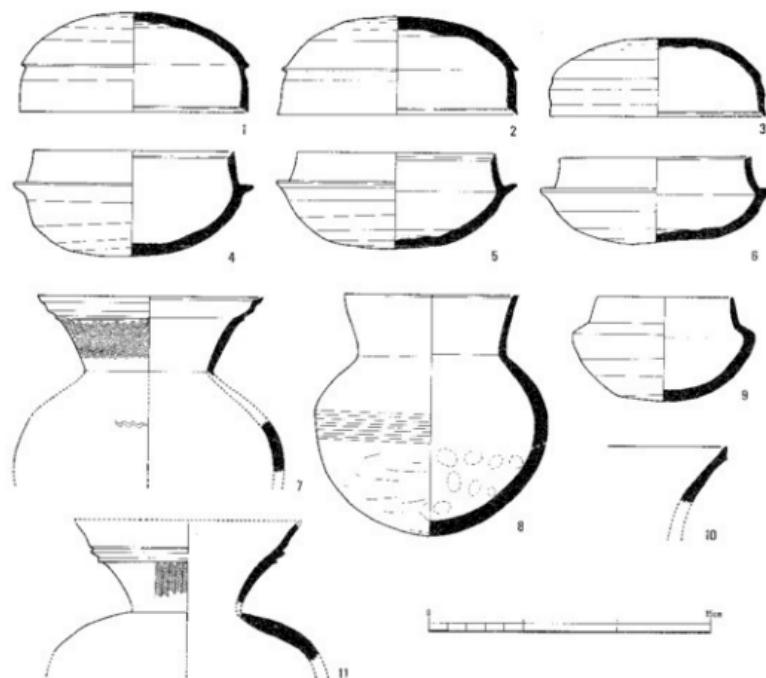


Fig.9 須恵器（縮尺1:3）

は半球形で、明瞭な肩を有する。口頸部は屈曲しながら内傾する。口縁端部は丸い。体・底部外面の約4分の3は、時計回りの回転ヘラ削り、その他の外面は回転ナデ。内面は、底部が不定方向ナデ、他は回転ナデである。色調灰色、胎土に1mm位の砂粒を多く含み、焼成良好。

10は甕の口縁部と推定される。細片のため口径を復元できない。大きく外反し、外面に稜を有し、端部は尖りぎみとなる。調整手法は内外面とも回転ナデ。色調淡灰色、胎土は比較的緻密で焼成良好。11は甕と推定される。口頸部と体部上端部の2片からなる。復元口径約12cm。頸部は大きく外反し、途中で内側へ心持ち屈曲し口縁部につらなる。口縁端部は残存しない。屈曲部外面に2条の凹線を有し、頸部外面にはクシ描き波状文を付す。体部は胴がよく張るものと思われる。体部外面と頸部内面に自然釉がかかる。調整手法は体部内面が回転ナデ、他は観察できない。色調黒灰色、胎土はよく精選され、焼成堅緻。

以上11個体の須恵器のうち、1～6、8、9の8個体は、2号墳周溝内土括幕から出土した一括遺物である。7も2号墳4区墳丘外から出土したもので、2号墳に伴なうものと推定される。10は3号墳東周溝埋土、11は3号墳北周溝外から出土した。ここでは、2号墳周溝内土括

墓出土の一括遺物についての編年観を述べておく。1～6の蓋杯においては、型式学的に明瞭な新旧二相を指摘することができる。すなわち、1・2・4・5の古相は、天井部・底部が丸く、蓋の縁が突出し、蓋・身の口縁端部に明瞭な段を有する。これに対し、新相の3・6は、天井部・底部は比較的扁平で、蓋の縁は突出せず、口縁端部の段は、蓋は明瞭であるものの、身では痕跡のみとなる。このような器形の特徴は、大阪府陶邑古窯址群を基礎とする田辺昭三氏の須恵器編年によれば、古相がTK 47、新相がMT 15に比定される。また、中村浩氏の編年によれば、古相がI型式5段階、新相がII型式1段階に対応する。<sup>①</sup> 2号墳周溝内土壙墓出土須恵器は、このような新旧二相を包含するある時点での一括遺物と考えられる。その絶対年代は、ほぼ6世紀初頭に比定されよう。

## (注)

① 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981年

② 中村 浩『和泉陶邑窯の研究』PP.158～165 柏書房 1981年

**土師器** 1は、第1主体より出土した小型壺で、全体の縦断約半分を残している。内外面とも淡褐色を呈し、口縁部外面及び内面はヨコナデ仕上げ、全体に調整ていねいで、器面内外とも平滑である。胴部外面には、ヨコ方向の刷毛目痕を残している。また内面底部には、指頭圧痕によるとみられる凹内を残す。胎土中には1mm程の砂粒を含むが、大粒のものはなく砂粒の混入も少い。

2は、東側周溝底部で発見された壺形土器で、上半部を残していた。特に口縁部内面の器壁の荒さは激しいが、外面は淡褐色を、内面は暗灰色を呈する。口縁部はヨコナデで仕上げられており、胴外面には荒いタテ方向の刷毛目痕を残す。ゆるやかに屈曲する頸部内面以下は、荒い横方向のヘラ削り痕を残している。胎土中には、1～3mmの砂粒が多く混入されており、口縁部外面にかすかにススの付着がみられる。

3は、2とともに東周溝底部で一括して出土した壺形土器であるが、器壁の風化が特に顕著で接合困難な資料である。部分的に接合した口縁部から胴部資料と底部資料を復元作図したものである。内外面とも赤褐色を呈するが荒激しく、本来の器面はほとんど残していない。外面肩部分にかすかに、タテ方向の刷毛目痕を残す以外、調整、仕上げについては、まったく不明である。胎土中に1～3mmの砂粒を多く混入している。底部内面には、指頭圧痕によるとみられる凹内が存在する。

津山地方の土師器編年は今だ手つかずの状態で、これら三点の土師器からもとめられる年代的位置は明らかでないが、大まかに時期の押えられる若干の資料にてらして、三点いずれにも時期差は認められず、出土状況からは周溝内埋葬共伴須恵器の年代観をうえうる。

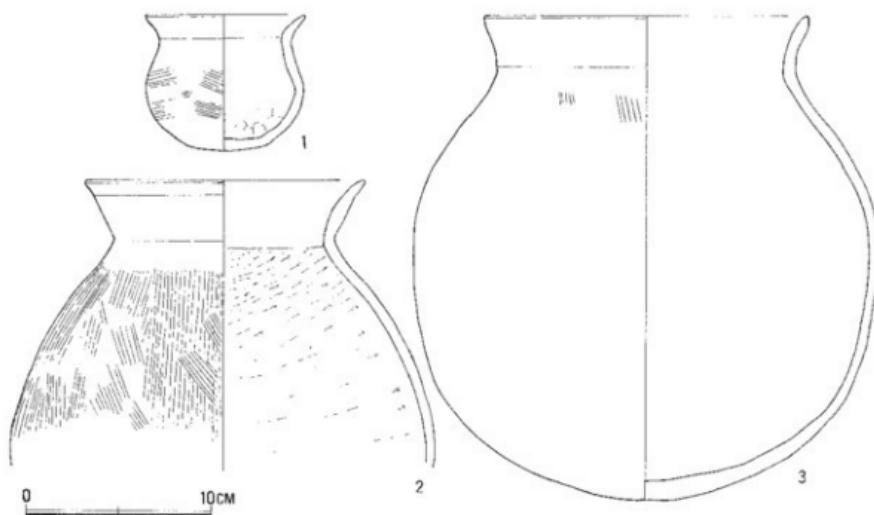


Fig.10 土器器 (縮尺1:3)

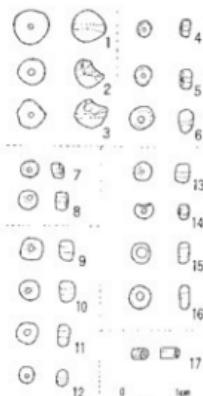
小玉 中心埋葬床部敷石東方で一括出土した。大半は敷石より下位にあり、擾乱沈下部分に遺存した可能性が強い。

確認総数は17個で、凝灰岩製とみられるIと、ガラス製とみられるIIに材質は分かれ。IIはさらに、その色彩及び形態に基づきa～fの5細分が可能である。

Iは淡緑色で1～3の3点が出上した。直径5～6mmの球状で直徑1mm程の穿孔がなされている。全体に風化顯著である。

II aは淡緑色を呈し、4～6の3点がある。直径3～4.5mmで、ドーナツ状のものと、穿孔部に面を残す筒状のものがある。II bは、淡青色で、7・8の2点があり、いずれも直径3mm程で、やや厚みのあるドーナツ状を呈す。II cは青紫色で9～12の4点がある。

直径3.5～4.5mmあってドーナツ状を呈す。II dは濃青色のものでFig.11 小玉 (縮尺1:1) 13～16の4点がある。直径4～5mmのドーナツ状を呈す。以上a～dは形態に多少の変異はあるが、本来同質、同一技法に基づき製作されたものと考えられ、色彩による識別ができるのみである。いずれも透明度をもち、直徑1～2mの孔を正確に貫通させている。II fは、暗赤色で17の1点のみ発見されている。径3mm、長4mmの筒状を呈し、1.5mmの孔を貫通させている。不透明である。



## ② 5号墳の調査

2号墳の北約15mに位置し、尾根中心よりややはすれ東傾斜面に基底をおいている。

調査当初は、この部分に古墳の存在を伺わせる地形変化が認められず、現況測量からははずれている。長方形台状墓の発掘に際し、周辺部の表土剥ぎによって発見された。

遺存していたのは周溝部分だけで、幅1.5m前後の周溝は、谷部に向って馬蹄形状に下降している。周溝断面は、浅い皿状部分とU字形のやや深い部分があり、暗褐色土ないしは褐色土の堆積がみられた。

出土遺物は、A点で溝底よりやや浮いて須恵器片1片が出土したのみである。

本墳は、直径5m程の低平な墳丘を有した円墳と考えられよう。

## ③ 3号墳端の調査

北に延びる尾根主軸から、基部で東に派生する尾根筋に位置し、やや傾斜の急な部分に築造されている。このため、墳頂、墳裾高差の少い西側部分で0.3m、東側のもっとも大きい部分で1.4mある。現況で直径9m程の円墳とみられ、盗壠痕跡はなく遺存状況良好。

今回の調査では、開発計画にかかる古墳北裾部のみ調査対象とした。この部分には、幅1.5m、深さ10~20cmの浅い皿状の周溝が墳裾に沿って巡り、墳裾には人頭大の転石がまばらに配されていた。盛土は赤褐色の地山上を主体とするが、部分的に有機質土を多く含む暗褐色土を盛土としている。断面図部分は、暗褐色土を主体とする部分であるが、上面には薄く赤褐色土が広がっていた。

周溝埋土の分層は困難で、埋土中から弥生土器少量、須恵器1片、土師質土器多数が出土した。土師質土器は糸切底の小皿中心で中世のものと考えられる。須恵器片は甕口縁部片Fig.9-10で、6世紀前半期のものとみられるが、3号墳に伴うものかどうかは明らかでない。



Fig.12 5号墳平面図、断面図(縮尺1:200)

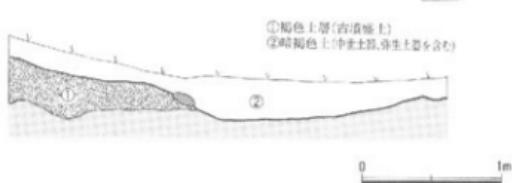


Fig.13 3号墳端土層断面図(縮尺1:40)

## 2. 長方形台状墓の調査

### ① 才ノ崎長方形台状墓

2号墳墳丘下に発見された弥生時代後期前葉の長方形台状墓である。丘陵最高所やや北よりに位置し、眼下に村の集落を望む。東方・西方は、丘陵により視野をさえぎられている。尾根基部の半担部を利用し築いているが、東西にとる長軸方向東側部分は傾斜面まで延び、特に北東隅は半担部を大きくはみだしている。

三辺で、墳裾に沿った幅2m程の周溝痕跡が確認でき、残る一辺も周溝が存在していたと考えられるので、本来は周溝が本墳丘をとり囲んでいたと判断できる。

7基確認された墓壙は、いずれも墳平担部に存在するが、各墓壙底の高低差が少いこと、本来台状墓占地範囲のうちではもっとも高かったであろうと考えられる2号墳丘下に残された盛土層基底部が、台状墓建造時の地表面と考えられることから、墳丘は外周斜面の削り出しによって整形し、上部盛り土によって半担に築成されたと考えられる。

2号墳下には約50cmほどの厚さを持つ盛土層が遺存し、上面に腐植土層が水平に延びており、水準高で174.6m 前後が古墳築成時の台状墓残存上面と考えられるので、東北隅などでは、少くとも1mの盛土造成のあったことが知られる。

墳端線は、概ね長方形をついでいるが、北東隅、東南隅、南西隅はわずかに張り出しているようにも見える。四隅突出型墳丘墓の初源例といわれる二次市の宗祐池西遺跡のものに平面形は似るようであるが、墳裾ないしは斜面に貼石等の石材を用いた痕跡は一切ない。

北辺部の周溝外側に、4m四方ほどの半担面が存在し、この部分では造構及び遺物の発見はなかったが、自然地形に加工を加えたことは明らかで、本台状墓に伴う造成面であろう。

台状墓長軸方向は、磁針東方向より約9° 北偏しているが、発見された7基の木棺墓とも、台状墓の平面形に忠実に軸を合わせているので、概ね、その配置は、東西・南北方向を向く直交型配置をとっている。

それぞれの墓壙間に切合の関係はなく、短期間に埋葬されたと考える妥当な配置状況を呈している。

墓壙規模は、一般に大型で7基のうち1基の例外を除き、墓壙幅方長軸規模は2mを越えている。

各墓壙とも副葬品の発見はなく、旧地表面で弥生土器が散在して発見された他、 Fig.14の1・2・3の3地点で弥生土器が比較的まとまって出土した。

出土土器の器種は、器台、高杯、壺類が多く、丹彩された土器が大多数を占め、また装飾性の強いものが多い。出土土器の所属時期は、いずれも大田十二社遺跡2式土器併行期のもので、台状墓築造、使用期間もこの時期におさまるものであろう。

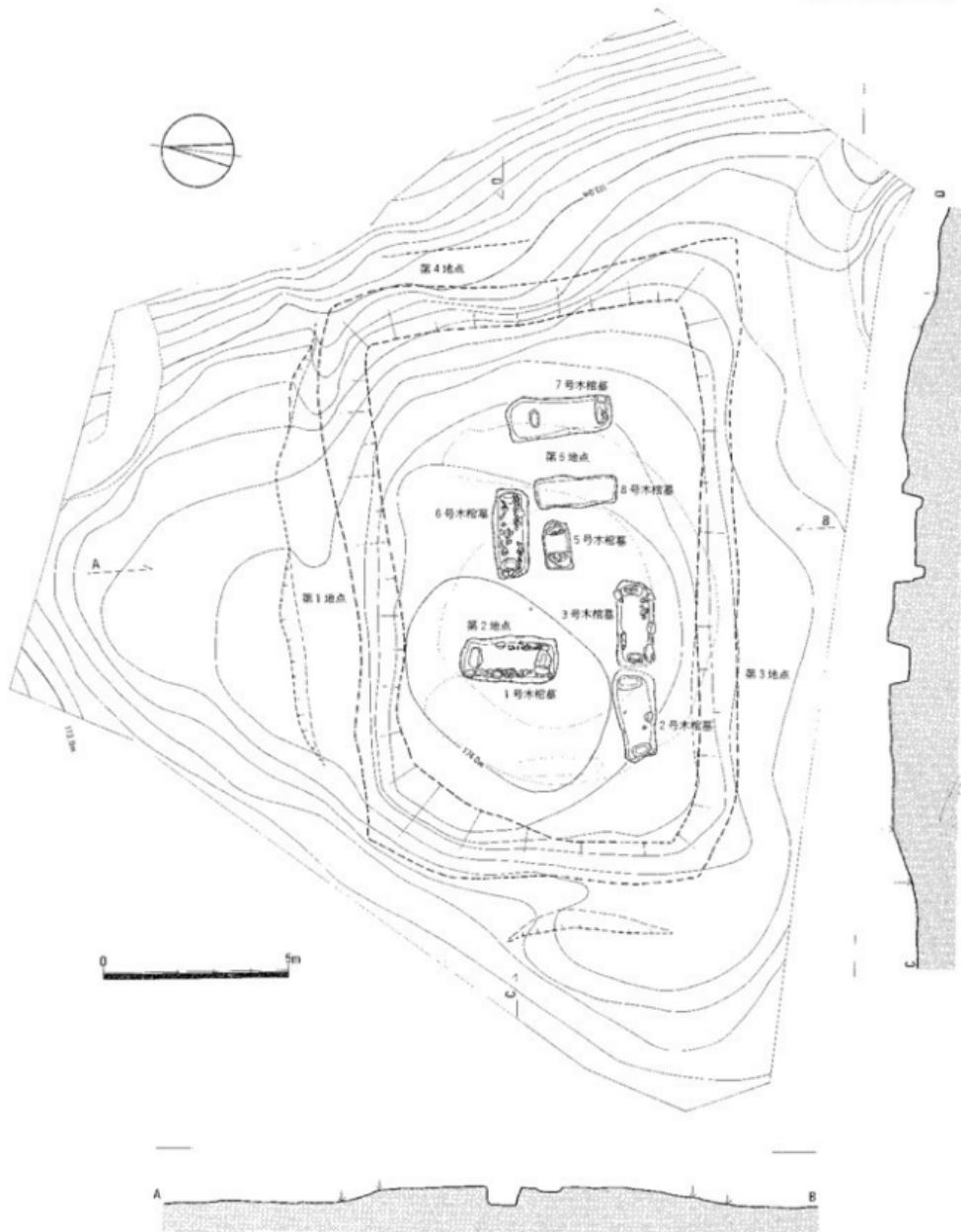


Fig.14 長方形台状墓全体図 (縮尺 1:150)

## a 木棺墓

**1号木棺墓** 南北方向に主軸をおく木棺墓で、墓壙掘方長軸長2.7m・幅1.3mの規模を有す。墓壙底面はほぼ水平にとのえられ、両妻には墓壙主軸と直交する組合せ式木棺の小口板を埋める、長楕円形で深さ30cm程の穴（以下小口穴と略す）を有する。

底面から垂直に立ち上がる墓壙壁面は、検出面より50cmの高さを残すが、墳丘旧地表残存面からの深度は約1mを計る。

棺存在痕跡は、土色の変化として遺存しているが、板材そのものの痕跡は確認できない。それによると、平面形はほぼ整った長方形で、長辺2.2m（一部推定）、短辺0.5mある。

棺幅を示す横断面では、木棺痕検出面より床面部へ幅を狭め、底面でのその幅は40cmに減じている。

小口穴間心々距離は1.9mで、棺平面プランと棺推定規模の差は、平面プラン規模が側板の長さを示していると考えることによって解決される。

側板部外方には、概ね人頭大の裏込め石が配され、石材長軸は棺軸に合っている。石材間に接する部分が少く、組み上げたものではない。なお、北東部側縁に石材の空白部分があるがこれは、2号墳壙ちぎりに際し石材を抜取った結果で、この部分にも本来3～4個の少兒頭大の石材が存在した。

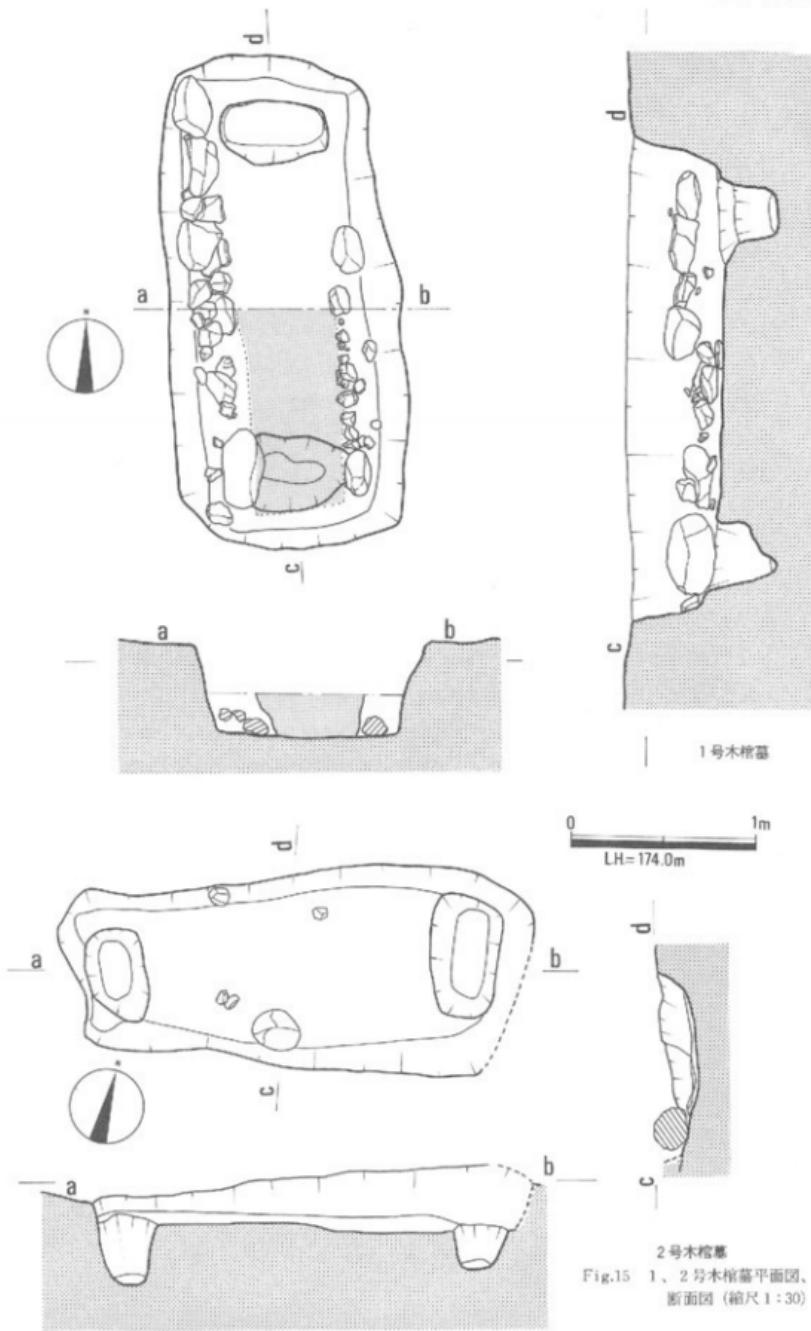
墓壙埋上上部で弥生土器小片が数点出土し、その中にスタンプ文様を持つものがあったが、取上げの不手際で粉碎された。旧地表面で、本幕に対応する位置から壺・高杯破片等の弥生土器が出土しているが、副葬遺物は発見されなかった。

**2号木棺墓** 東西方向に主軸をおく木棺墓で、墓壙掘方長軸長2.3m・同幅1.1mの規模を有する。2号墳端部にかかり、南半はその周溝による削平、擾乱が激しい。小口穴をもち、壁立上がり部に、裏込めに用いられたと考えられる石材数個が遺存していた。小口穴間心々距離は、1.9mである。出土遺物はない。

**3号木棺墓** 2号木棺墓に直列する木棺墓で、墓壙掘方長軸長2.3m・同幅1mの規模を有す。2号墳端に位置し、その周溝掘削による南半の削平が激しい。小口穴をもつ。横断面土層に顯われた木棺痕跡の幅は、40cm程である。

側板部外方に、人頭大の裏込め石が棺主軸方向にそろえて配置されている。また、小口板部外方にも、それより小ぶりの石材を裏込めに用いている。小口穴間心々距離は、1.8mである。出土遺物はない。

**5号木棺墓** 南北方向に主軸をおく「木棺墓」で、墓壙掘方長軸長1.3m・同幅0.7mの規模を有する。小口穴をもつ。検出面より墓壙底まで約10cmの深さを有するが、他の墓壙に比し、土色による識別困難で、小口穴形状も整ったものではない。木棺墓とする確信は得られなかつたが、その可能性は強い。「小口穴」間心々距離は、0.7mである。出土遺物はない。



**6号木棺墓** 東西方向に主軸をおく木棺墓で、墓壙掘方長軸長2.4m、同幅1.0mの規模を有する。検出面からの深さは、最大50cmを残す。木棺痕跡がかなり鮮明に残されていたが、土圧によるとみられる変形を相当うけており、このことは北側縁で特に著しい。

木棺痕跡平面検出での棺規模は、長辺2.1m、幅30~40cmを計る。東小口部で、側板痕と、小口板痕が不明瞭に識別できた。

両側板部外方及び小口板部外方に裏込めの石材を用いているが、挙大の石材を多く用い、側板に沿う部分は、一見粗雑な竪穴石室側壁を思わせる部分もある。

横断土層面に残された木棺痕は、北側からの土圧で押しつぶれ、極端に変形している。このことは、北側縁部の石の乱れとも一致している。土層断面に基づく棺底幅は、20cm前後の値を示しているが、本来は40cmほどの幅をもつものであったと判断できる。

小口穴間心々距離は、1.9mである。

墓壙内の棺部分埋土より弥生土器小片2片が出土しているが、いずれも細片で細かい特徴のわかるものではない。

**7号木棺墓** 南北方向に主軸をおく木棺墓で、墓壙掘方長軸長2.9m、同幅1mの規模を有するが、最大深度10cm程を残すのみで、全般に遺存状況はよくない。

棺側板裏込めに、石材を用いた痕跡を残すが、全体の石材使用状況は明らかでない。

小口穴を有するが、北小口穴は他と異り、墓壙掘方妻部壁面より70cmも内に寄っている。小口穴間心々距離は、1.8mである。出土遺物はない。

**8号木棺墓** 南北方向に主軸をおく「木棺墓」で、墓壙掘方長軸長2.2m、同幅0.8mを計る。小口穴をもたない唯一の例である。一般に舟底形の底部を有する土墳墓とは異り、底面は平で、壁面は垂直に立ち上がる。七層観察による木棺痕跡の確認ができなかったが、墓壙の形状から木棺墓と考えたい。

竹ノ下遺跡でも、14基の「木棺墓」のうち1基に小口穴をもたないものが含まれていたが、これも上層観察による木棺痕の確認はできなかった。

この種の墓壙に木棺が使用されていたという確証はないが、小口穴をもつもの、もたないものの差は、木棺の組み方の相違を示すと考えてよいだろう。出土遺物はない。

以上、木棺墓の特徴としては、5号木棺墓の例外を除き、いずれも大形で均一化していること、正確な直交配置をとっていること、出土土器は大田十二社遺跡2式土器に属し、そのうちでも時期が限定される可能性があることなどがあげられる。

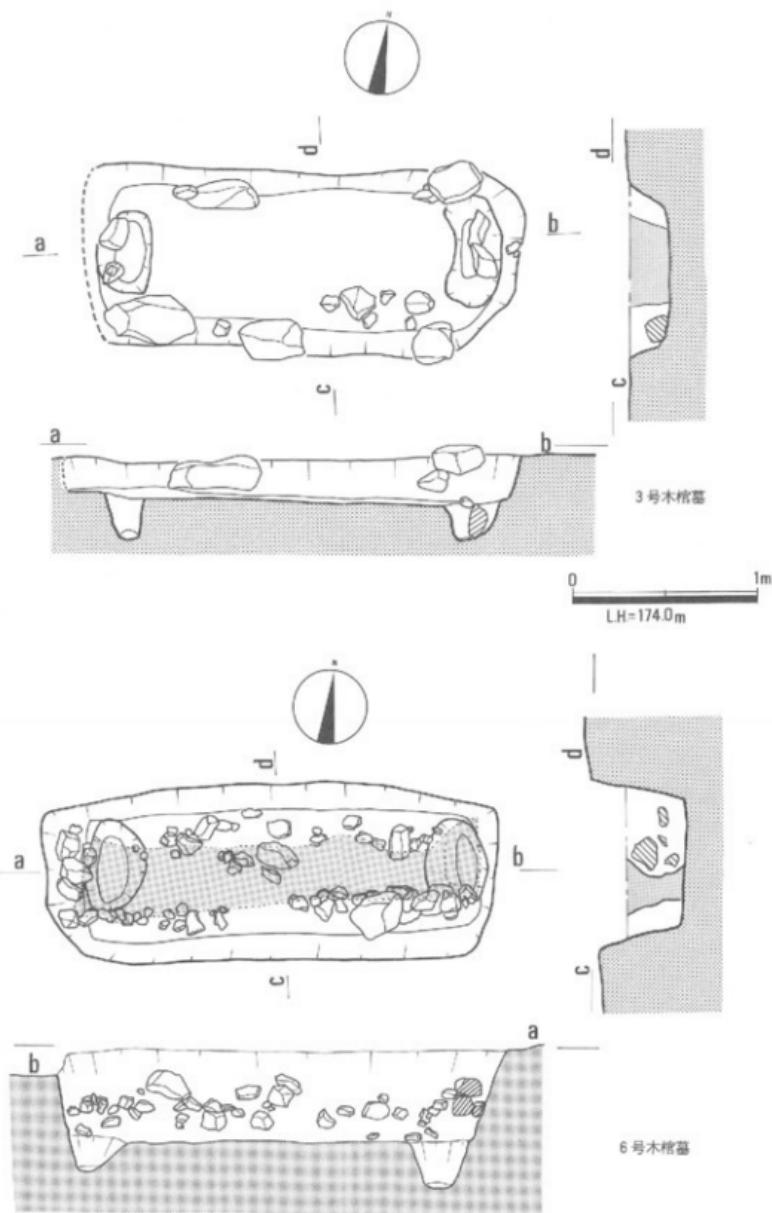


Fig.16 3、6号木棺墓平面図、断面図 (縮尺 1:30)

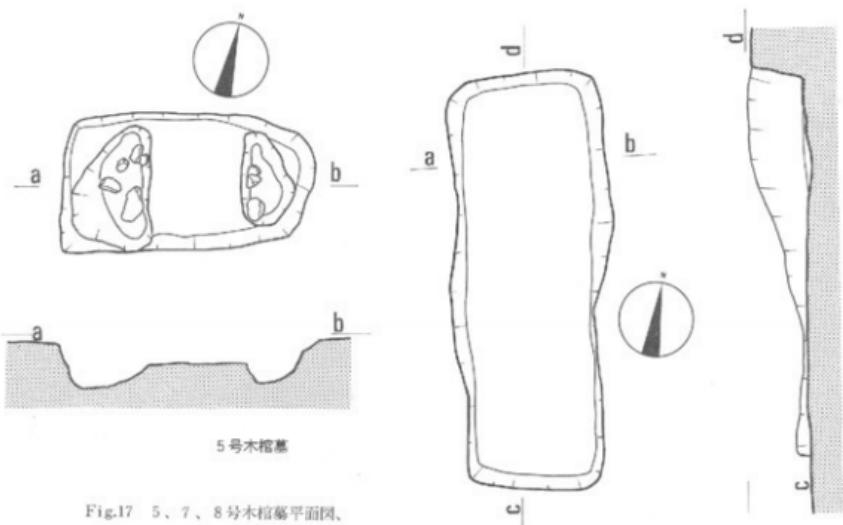
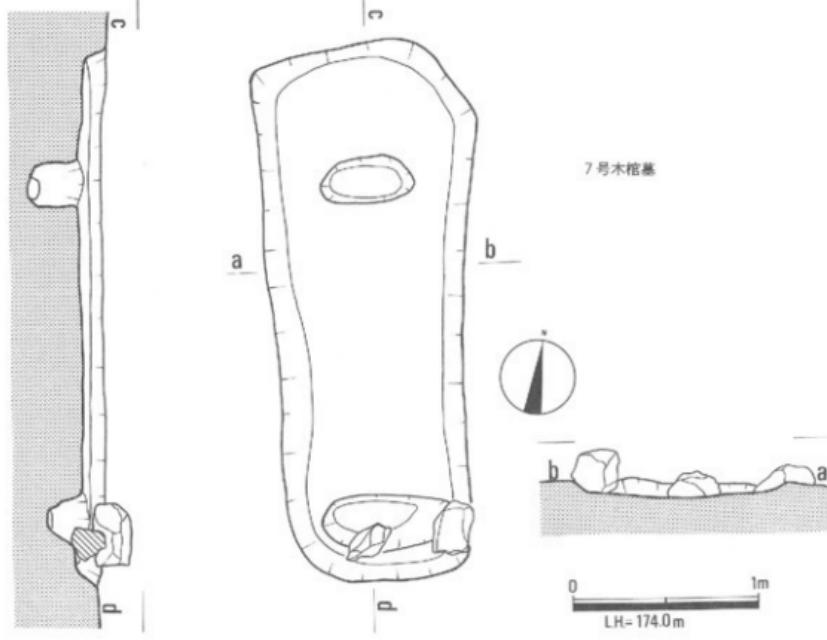


Fig.17 5、7、8号木棺墓平面図、  
断面図 (縮尺 1:30)

### b 出土遺物

**弥生土器** 長方形台状墓に伴う遺物は弥生土器のみで、すべて後期に属し、なかでも大田十二社編年2式併行期と考えられるものが大多数である。

出土地点は、北周溝部（第1地点）、1号木棺墓上ないしは6号木棺墓北部分の盛土中（第2地点）、南周溝部（第3地点）、東周溝部（第4地点）、7、8号木棺墓周辺（第5地点）から、それぞれ比較的多く集中して発見された。しかし、1、2地点が1次堆積とみられる以外、3、4地点では中世土器が混在し、第5地点は2号墳東周溝部にあたり、下層から土師器2個体（Fig.18-2、3）が発見されている。

発見总数は、740片、器種識別可能な破片の数は、502片で、その器種別内訳は、壺109片、高杯190片、器台203片で、個体数推定値は、壺6個体以上、高杯17個体以上、器台12個体以上各20%、40~50%、30~40%程度の構成比をとるらしい。

発見された埋葬施設以外に壺棺等が存在した可能性があるが、出土土器で棺に使用された疑いのあるものは、第1地点出土の大形の壺形土器片以外には明確ではない。

いずれも、風化、磨滅の激しいものが多く、必ずしも全容は不明であるが、本来大多数のものは丹彩されていたのではないかとみられるほど丹彩土器片が多い。ただし、この時期は集落址で発見される土器にも丹彩例が多く、本遺跡では丹彩例の多い器台、高杯等の破片が多いので、そのことをもって必ずしも葬送用に特殊化した土器群とはいえない。

とはいって、スタンプ文様、円形浮文、櫛描波状文、羽状文、鋸歯文等を多用し、装飾性の強いものが多く、全体として集落遺跡で通常用いられる日常土器とは分化傾向を示していることは確かであろう。

**器台形土器** (Fig.18-1~13) 1~8は口縁部片で、端面にヘラ描の鋸歯文を巡らすもの（1、6、8）、櫛描波状文をめぐらすもの（3、4、5）櫛状工具により羽状文を巡らすもの（2）スタンプ文様を巡らすもの（7）がある。5は、小さぎみの櫛描波状文を巡らしたのち、円形浮文を貼付け、さらに竹管文を押し付けている。また7は、上段横一列に三重円のスタンプ文を押し並べ、各スタンプ文間の下方にそれぞれ二重円のスタンプ文を横一列に巡らし、上段スタンプ文と下段スタンプ文間を細いヘラ描の沈線文3条ほどで連結している。

また文様帶上下にそれぞれ1条の界線を巡らすものが多い（1~3、5~7）、13は、刷部片、4孔の飾孔を周囲に巡らすとみられるが、小片で不明、器壁の荒激しく調整不明。

9~11は脚部片で、いずれも脚端は肥厚し端面を形成する。9は外面にヘラ磨き痕を残し、端面に1条の凹線風のかすかな段を巡らす以外、列点文の痕跡がかすかに認められる。10の端面上端には、きざみ目文が入っていた可能性があるが明確ではない。11は、外面に刷毛状工具による整形痕がかすかに残り、櫛状工具による羽状文が加飾され、端面上端にきざみ目が加えられている。2と同一個体である可能性が強いが、いずれも小片で認定は困難。12は全形がほぼ

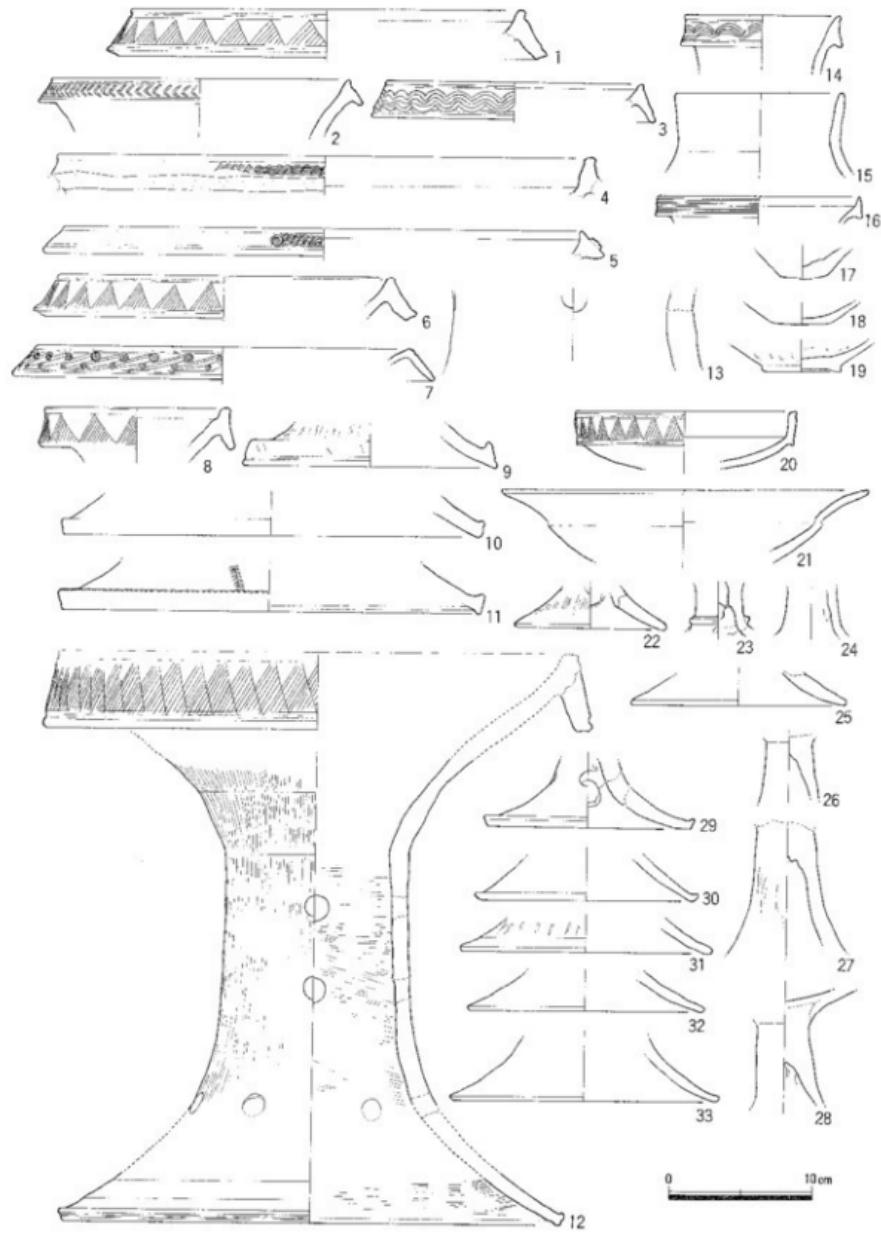


Fig.18 弥生土器 (縮尺1:4)

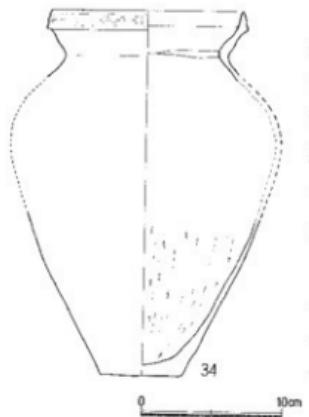


Fig.19 弥生土器（縮尺1：4）

推測できる唯一の個体で、たれきがった口縁部端面には複合鋸歯文が巡り、下端に1条の界線が巡る。外向顎部から筒部にかけて、タテ方向の刷毛目痕跡が残されている。脚端部はやや肥厚し、面を形成して1条の凹線を巡らしている。内面は、筒部から脚部にかけてヨコ方向の刷毛目痕跡が残る。

以上器台形土器は、いずれも小破片からの推定復元が多く、中には壺形土器、高杯形土器口縁部片が含まれている可能性もある。以上のうち、丹彩痕跡をとどめるのは3のみであるが、本来ほとんどが丹彩されていた可能性が強い。

高杯形土器(20~33) 20、21は眞部破片。20は、直立する立上がり部外面に鋸歯文を巡らし、文様帶上下に各1条界線を巡らしている。21は、端部内面に1条の段を残している。23、24、26~28は筒部片で、23は筒部下端に貼付突帯を巡らす。いずれも、分割成形による高杯形土器とみられる。22、25、29~33は脚部片で、脚端部を肥厚させるもの(29、30)とまるくおさめるものがある。21、22、28、30、31に丹彩痕跡が残されている。

壺形土器(14~19、34) 14~16は口縁部片、14は端面に柳描波状文を巡らし、上下に1条の界線を巡らす。16は、罐面に櫛状工具による平行沈線文を巡らす。磨滅激しく確認困難であるが疑凹線状を呈する。17~19は底部片。19は外面にヘラ磨き痕、内面にヘラ削り痕を残す。18外面には丹彩痕跡が残る。いずれも器壁荒激しく細部調整は不明。34は、ほぼ全体のわかる壺形土器で、やや内傾しながら立上がる口縁部外面に凹凸の少ない3条の凹線文を巡らす。刷部外面には、タテ方向の細い刷毛目痕を残し、内面はヘラ削りで仕上げられている。

出土地点 図示した土器の各出土地点は、第1地点—9・10、第2地点—1・3・4・5・7・8・11・14・17・19・20・22・23・24・25・26・27・28・30・31・32・33で、20・23・26・27は6号墓北側部分、その他は1号墓直上ないしはその附近で発見され、2号墳葺石部から発見されたものもある。第3地点—6、12、第4地点—16・29・34、第5地点—15・18・21である。

文様構成 本遺跡出土土器に施文された文様には、鋸歯文、羽状文、スタンプ文、円形浮文列点文等が存在する。鋸歯文はいずれも同形で、もっとも卓越しているが、これ以外器台なし壺口縁部端面に柳描波状文を施文する例が多い。3の波状文は、「紫雲出」遺跡報告書の柳描波状文分類II aに属し、これに類似した柳描波状文は京免遺跡 S D 187の器台口縁部に、また、倉吉市服部遺跡<sup>④</sup>、阿弥大寺遺跡<sup>⑤</sup>に存在する。倉吉のものは、いずれも共伴土器は不明であるが、丸重式土器ないしはやや後出の土器群に併行する個体と土器そのものからは判断される

ので、これらはいずれもほぼ併行関係にあるものとみてよい。

スタンプ文のうち、7の口縁部に施文されているものは、上下二段の同心円文を各斜めに結び、連続渦文に似た構成をとっている。また7以外にも別個体と考えられる網片が数点発見されており、それぞれ同様な部位の破片と考えられるが、これは、二重円一列を相互に斜線一本で結び文様帶上段に小豆大の円形浮文を一列に密に貼り巡らしている。

名越勉、甲斐忠彦によるスタンプ文様の分類に基づくと、両者ともC類に属し、同類型のスタンプ文様出土遺跡として、大和唐古遺跡、攝津田能遺跡、美作下市瀬遺跡、同横の前遺跡があげられている。近年倉敷市船築遺跡の採集品の中にも類品が認められるが、藤田憲司の教示によれば、紀伊方面にも多く認められるということであり、本遺跡出土土器は全般に佐用町吉福遺跡との類似点がみいだされるので、その分布が旧出雲街道沿に濃密なことは、土器文化の伝播経路の一つを考える上で興味深い。

#### (注)

- ① 1981 e 河本 清、中山俊紀、安川豊史、行田裕美  
「大田十二社遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第10集』津山市教育委員会
- ② 1964 小林行雄、佐原 真「紫雲出」『北畠町文化財保護委員会
- ③ 1982 a 中山俊紀 「草免・竹ノ下遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第11集』津山市教育委員会
- ④ 1983 f 藤田雅昭 「倉吉市阪部遺跡発掘調査報告書(遺物編)」倉吉市教育委員会
- ⑥ 1973 e 名越 勉、甲斐忠彦「スタンプ施文土器の新例」『考古学雑誌第58巻4号』日本考古学会
- ⑦ 1976 b 近藤義郎 「古墳以前の埴丘墓一橋築遺跡をめぐってー」  
『岡山大学法文学部学術紀要第37号』岡山大学法文学部
- ⑧ 1974 a 石野博信、村上祐場、松下 譲  
「播磨・吉松遺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査集報告第2集』兵庫県教育委員会

### 3. 中世土器

中世土器は、2号墳東半の削平箇所から3号墳北側にかけて発見された。

1～3は、勝間田焼とみられる淡灰色須恵器。1はほぼ完形に復元できるが、2・3は小破片からの推定復元。1は、口径15.5cm、高さ5.7cm。内外面ヨコナデ仕上げで、底面は回転糸切り痕を残す。1、2には、口縁部外面に重ね焼によるとみられる黒色帯を有す。

4、5は、土師質杯で淡赤色を呈す。外面ヨコナデで、底面は回転糸切り痕を残す。4は、口径14.5cm、高さ3.6cm。5は、口径17.8cm、高さ3.6cm。6は、土師質高台付杯破片とみられ、淡褐色を呈す。外面は、粘土帶を示すとみられる凹凸が激しい。

7は、土師質高盤台部で淡褐色を呈す。

8～14は、土師質小皿で淡赤褐色を呈す。内外面ヨコナデ仕上げで、底面は糸切り痕を残す。8～14の各小皿復元口径／器高数値は、8は9.4 / 1.7cm、9は9.0 / 1.4cm、10は、8.2 / 1.5cm、11は、8.0 / 1.0cm、12は、9.0 / 1.3cm、13は、9.0 / 1.5cm、14は、7.8 / 1.6cmである。これらに伴う造構種別は不明であるが、2号墳東半の削平箇所からその東、3号墳北側に多く発見されたことから、かつて2号墳上に祠等の祭祀対象が存在し、それとともにものであった可能性も考えられる。

現状では、これら土器の所属時期を正確に判別できないが、中世以降、おそらく中世期に大半は所属するものであろう。

※安川豊史「美作国府跡発掘調査報告」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第15集』 津山市教育委員会1984

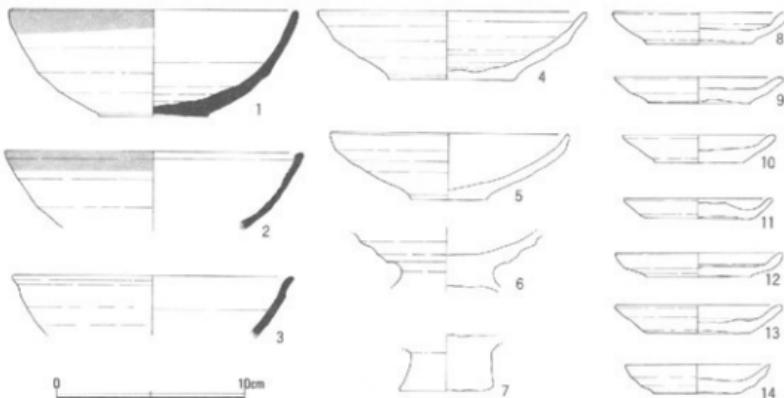


Fig.20 中世土器 (縮尺1:3)

## 第4章 結 語

### 1. 美作地方弥生時代墓制の特性と問題

はじめに 美作地方での弥生時代後期墓地遺跡における特殊器台形土器の出土状況が、その発達を生んだ県南部地方とやや異なること、その事情については集団構造上の差に基づく可能性の強いこと、あるいは、<sup>⑨</sup>弥生中期の竹ノ下遺跡の木棺墓群が一家族墓であり、後期の集団墓と比較検討する上で良好なモデルとなりうることなどを、かって指摘したことがある。

それ以降、美作地方の弥生墓制ないしは集団構造に関する論考も若干数発表された。<sup>⑩</sup> それぞれ独創的な見解も多くみられ、教えられる点が多くあるが、誤解に基づくとみられる批判、理解に苦しむ集団把握もある。

その責任の一半は、具体的な説明をおこたり、單なる見通しとして手短に述べすぎた筆者にあると思われるので、その見通しの若干について墓地遺跡に限りりますこし具体的に述べ、オノ畠遺跡調査報告書のまとめとしたい。

**家族墓の構成** 竹ノ下遺跡の木棺墓群Fig.21が、一家族墓群と考えられることは先にくりかえし述べたので、ここではその理由を省略する。

10m四方に発見された木棺墓は総数14基ある。必ずしも遺存状況は良くないので、削平を受けたもの、西側で宮川に洗われたもの、墓の可能性のある土壤を考慮するとしても、この墓地の被葬数は発見された墓数の倍を越えることはない。

棺規模は、乳幼児を納めるとみられる小形のものから成人用のものまで一連の変異がある。棺主軸方向は、東西9基・南北4基、いずれにもあてはまらないもの1基ある。東西方向が卓越しているが1基を除き、正確な直交型式をとっている。

規則的配置をとっていると考えられるから、それに一定の秩序を求めるべくすれば以下のような構成を仮定できる。

10m四方の墓地中央部に、同規模の成人棺G5・G6・G8が長辺を接し、短辺をそろえて三棺並置されている。頭位が位置規範を律すると考えなければならないから、この三棺を墓地の中心と考えることができる（必ずしも最も古いということではない）。この三棺をA群としよう。そうすると、この三棺を中心に他の棺は平行して、あるいは直交してA群を取り囲むと考えなければならない。現象的には、東側のG9・G10をb群、西側のG14・G13をc群、北側のG2・G3・G4・G7をd群、南側のG12・G11をe群とすることができ、b-c-d群とも幼児棺を含む。さらに外方に、方位の定まらぬG23が存在するのでこれをf群とすることができる。抽象化して図示すれば、Fig.22のモデルTのようになる。

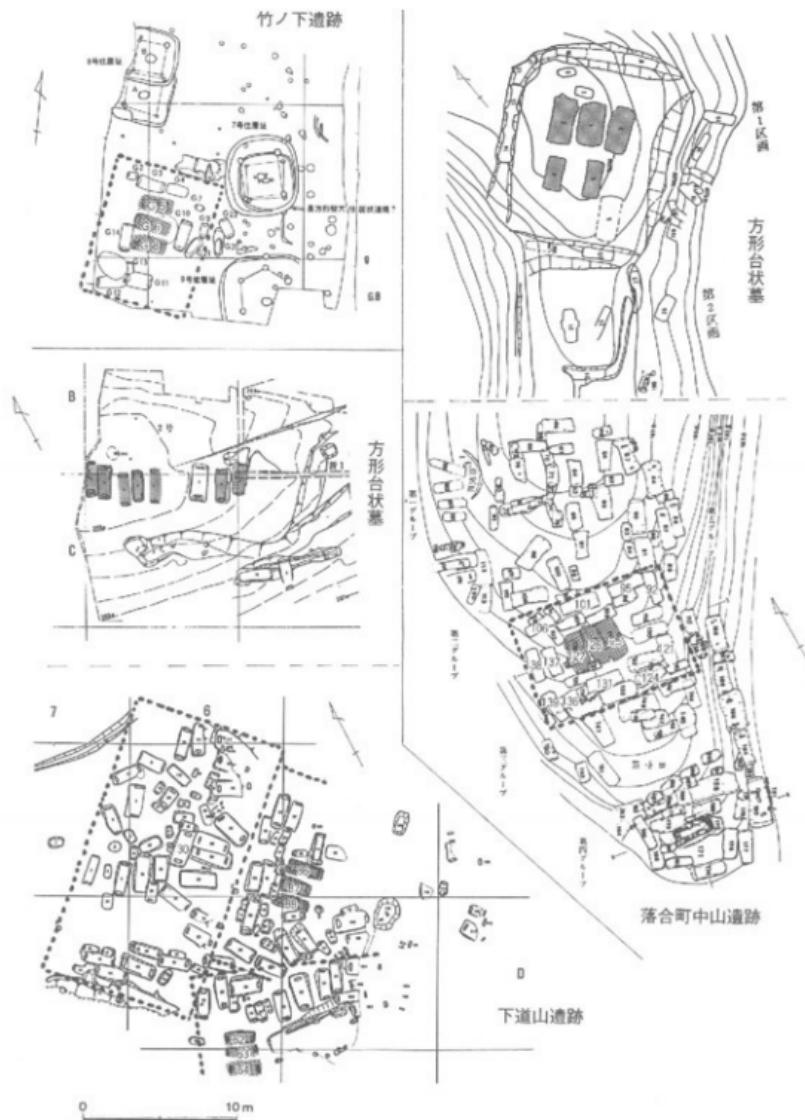


Fig.21 美作地方の墓地遺跡（方位不同）

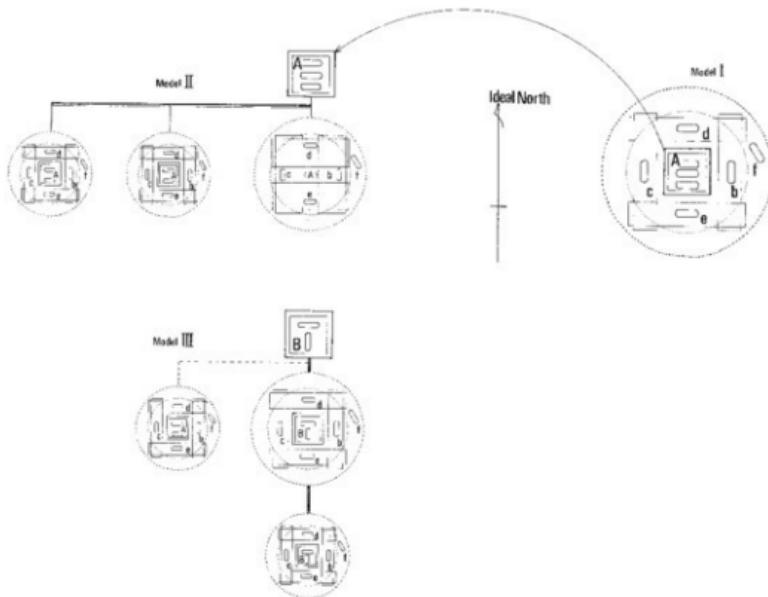


Fig.22 墓地遺跡構造モデル類型表

中期墓群はさまざまな変異を含むが、基本的にはこういった配置構造を示す、といった保証は今のところ発掘例が少ないのでない。家族墓の作業モデルⅠとしておこう。

**集団墓** 仮にモデルⅠが成り立つとして、後期集団墓下道山遺跡と比較検討してみよう。分析にあたっては、調査者による南北二群区分を基本的には尊重したい。<sup>④</sup>

多数の墓は、方向性も不定で一見無秩序に営まれたように見える。まず南群に目をそいで成人棺並置例を探してみると、86・87・88が棺北西短辺をそろえて配置されているのがみつかる。さらに62・63・64が同規模棺で正確に並置されているのがみつかる。その他並置とみられるものもあるが、直列規格が卓越すると考えられるので除外する。

この2並列棺群と比較的全体の規格性の強いとみれる北群に群別補助線を入れるとFig.21の群区分ができる。南群の2群は不規則とはいえ、並置棺短辺方向に直交方向の棺があり、長辺方向に軸を一致させる棺が存在する。並置棺62・63・64の東北方に直交棺がならび、その東に平行棺が配されているのは、地形の制約によると考えれば、基本的な配置構造をとっているとみられる。

ところが、北群には並置棺は見あたらない。しいて中心棺を仮定するとすれば、30である。そのことを除くと、棺は南東方向に向けてコの字形に配されている。従って、下道山遺跡は、

きわめて不規則な棺配置を示すが、地形の制約、モデルⅠの「群が卓越してより複雑な様相を呈している」と考えれば、モデルⅠの少くとも3群の組み合わせないしは変形と考えてもよいだろう。（まさにそのことが集団墓の特徴なのだが）

こういった分析は、見解の相違とうけとられるので、地域はやや異にするが落合町の中山遺跡後期木棺墓群で確かめてみよう。<sup>⑨</sup>

A調査区第2グループは、まさに基本モデルを呈示しているといえる。南北方向の並置棺125・126・127は、モデルⅠのA群そのもの、95・101・106はd群、137・138・139はc群、136・131・124はc群、121・92はb群で、「群に移行しつつあるものも直交配置をとり、それは北方へ広がっているようにみえる。

第1区画台状墓をみよう。台状墓上は、三棺並置とその亜形によってのみ構成されている。周溝内には、規則的に棺が配されている。並置棺とその他の棺の差が歴然としているが、そのことはともかくとして、モデルⅠが基本的には有効なことは、この2例からも推測がつく。

それでは、もう一度下道山遺跡にかえて全体構成を検討してみよう。

下道山遺跡では、北群北西30~40mのところに台状墓2基が発見されている。2号台状墓は全城が発掘されていないので、全体の棺構成は不明であるが、2+α棺、3棺、2~3棺並置の木棺墓のみで構成され、いずれも主軸方位にずれではなく、同形態の棺ばかりなのはモデルⅠのA群と特徴を同じくしている。1号墓は二棺並置の可能性があるが、それが大きくここでは考慮に入れないと。

時期的関係、木棺墓群と台状墓の相互対応関係を無視して考えると、両者は空間的に対応しているから、下道山遺跡の台状墓の被葬者はモデルⅠのA群が独立した墓域をとったものと考えられる。抽象化して図示すれば、Fig.22 モデルⅡとなる。

台状墓被葬者が、家族墓A群の独立とみることができるなら、台状墓被葬者は家族構成の中軸成員ということができる。親子関係か、夫婦か、兄弟（姉妹）関係か。A群は、複数棺並列を基本とし求心配置をとるものがないので、親子関係は可能性が薄い。また正確に並置されることを前提としているから同世代を葬った可能性が高い。夫婦か兄弟（姉妹）か。二棺並置が基本となっていないところから、また切り合うように三棺並べられる例が多いことから、それは兄弟（姉妹）関係を示すと考えたい。

下道山遺跡のあり方は、父系血縁組織を前提に成立した「兄弟関係に基づく大家族」の拡大集団を示しているだろう。これを作業モデルⅡとする。

**オノ峯長方形台状墓** ところが、オノ峯長方形台状墓上の棺配置をみると、それら二者とは、やや異っているように見える。中心と周辺との対応を考えるとすれば、1・6号棺を中心棺とみななければならず、両棺ともそれぞれにふさわしいあり方を示している。しかし、両者は並置関係ではなく、直交型の配置をとっているのである。なお、8・7号棺は並置棺と考えられな

くもないが、両者の棺形式が異り、並置棺とは考えにくい。一方2・3号棺は直列配置を如実に示している。

従って、全体としてみれば、1・6号棺を中心に2・3・8・7号棺がそれを取り囲みモデルⅠと同様な配置構造をとっているが、大きく異なるのは、中心棺が直交配置をとること及び小形棺が排除されていることである。（5号棺は小児用棺である可能性もあるが明確ではなく、そうであっても一般的な家族墓と対比すると例外的存在とみなせる。）

この墓地は、モデルⅠ、モデルⅡとの対比において、家族ないしはその拡大形態の単系血縁集団のうちの限定された人々を葬った墓と考えられるから、家長ないしは単系血縁集団創始者夫婦を中心にその近親者の特定のものを葬った墓域と考えられる。中心2棺が夫婦であるという確証がなく、これら以外の成員の墓域の状況はこの遺跡では不明であるが、それらの対応関係は仮定できるので、これを作業モデルⅢとする。

集団墓群の変遷過程からみて、墓地遺跡の変遷は、理論的にはⅠ→Ⅲと推移したことが考えられるが、実際にみられる弥生後期の墓地遺跡は、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲないしはそれぞれの変異形態としてあらわれているようである。

**地域共同体の構成** 弥生後期に美作地方で集団墓（単系血縁集団墓地、以下集団墓と略す）が発達するのは、モデルⅡ、Ⅲが普遍化してくるからであって、血縁集団が経済単位として強い機能を発揮してくることによると考えられるが、地域共同体はこういった複数の血縁集団で構成されていたはずである。これら相互の関係は明確でないが、土器のあり方あるいは散発的にみられる墓制のあり方から、複数の系譜集団で構成されていた可能性が強い。

ところで、美作地方でも、数ヶ所の墓地遺跡で特殊器台形土器、壺形土器が発見されている。<sup>㊷</sup> それらは、瀬戸内沿岸部、わけてもその発達の中心となった地域では、集団墓から抜け出つつある、あるいは抜け出した個人中心的墳墓から出土することが多く、その特性である複雑な文様構成、変遷過程は、墳丘墓の発達とあいまって特定の系譜集団の求心的構造を反映しているようである。換言すれば、その発達は、系譜集団の序列化を反映しているのであり、「首長」権の譲承過程をなんらかの形で示していると考えられる場合が多い。

ところが、美作地方で特殊器台形土器、壺形土器が発見された権現山遺跡にしても上原遺跡にしても集団墓の一角からそれは出土しているのであり、遺構は末期で不明であるとはいえ、丸山遺跡、下道山遺跡にしてもこれらのものとはそう大きくかけはなれた墓地形をとるとはみえない。また、中山遺跡についての調査者の発掘所見によれば、それらは墓群に対応しているのであって、特定の墓に対応するものではない。<sup>㊸</sup>

いずれにしろ、そういう墓群に「首長」位にあったものが含まれているにしろ、首長墓に特殊器台が伴うのではなく、集団墓に特殊器台が対応するものであることは確かだろう。

しかしこのことは、少くとも、特殊器台を伴う集団墓成員の系譜の主なものが、特殊器台で

示される系譜と合一化している蓋然性を著しく高めるものではある。

一方、先にふれたように、津山地域の弥生後期の日常土器にあらわれた構造は、特殊器台を発達させた地域と諸点で大きく異っており、土器系譜からみれば、日本海沿岸部ないしは東部諸地域の直接的影響が顯著で、その分布からみれば変換地帯と位置づけられ、その多数が前者と本来同族的諸関係を保っていたとはとてもいえない。集団墓のあり方は、多数存在した血縁<sup>⑤</sup>集団が社会集団の基礎単位となっていたことを示しており、分節構造が基本的性格であったことを示している。

そうすると、後期後葉にこの地域の集団墓に特殊器台が出現する事実は、少くとも特定の血縁集団（首長選出基盤の一つである可能性が高い）に系譜上の再編ないしは変換がおこったと考えるべきであって、現在知られている特殊器台は、ほぼ類似した様相を示すことから、その時期は大田十二社4期をそれほど遅らない頃と考えられる。そういう変換の背影には、集団間の極度の緊張関係の存在が予測できるが、特種器台の出土地点が、いずれも通交上の要衝であることは、このことに關し暗示的である。

しかし、そのことはただちに旧来の分節的集団構造に変換を生むものではなかったらしい。構造上の二元性を孕みながらも、旧来の集団構造が支配的であったことは、墓制上に変革が認めにくいということが示している。

こういった経過を擬制的と表現するにしろしないにしろ、それを特殊器台形土器の拡散過程の実体であると考えれば、変換地帯をのり越えた地域で、在地的墓制に対応し特殊器台が出土することは、またよりよく理解できるにちがいない。

#### (注)

- ① 1981 e 河本 潤、中山俊紀「宮川流域における弥生社会の展開過程」『大田十二社遺跡』  
津市教育委員会
- ② 1982 a 中山俊紀「京免・竹ノ下遺跡」津山市教育委員会
- ③ 1983 a 西川 宏「古衛」『歴史公論3』雄山閣
- 1983 c 高橋 譲「二世紀代における共同体の変容」『岡山県史研究第5号』岡山県史編纂室
- 1984 e 近藤義郎「四隅突出型埴丘墓二題」『竹田遺跡発掘調査報告書第1集』鏡野町教育委員会
- 1984 f 藤田忠司「単位集団の居住領域」『考古学研究第31卷第2号』考古学研究会
- 1984 II 高橋 譲「組織文の展開と特殊器台」『岡山県立博物館研究報告5』岡山県立博物館
- ④ 1977 a 栗野克己、岡本寛久「下道山遺跡緊急発掘調査概報」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告17』
- ⑤ 1978 c 奥和弘、山廢康平「中山遺跡」岡山県落合町教育委員会
- ⑥ 美作地方の特殊器台、特殊器出土地としては、下道山遺跡、権現山遺跡、丸山遺跡、上原遺跡(津山市)、中山遺跡(落合町)、仁王免遺跡(中央町)、念仏寺山遺跡(新庄村)がある。
- ⑦ 1978 c 注⑤
- ⑧ 1984 j 中山俊紀「弥生土器余話」『郷土館案内第3号』津山市立郷土館



# 写 真 図 版





2



3



4

1. 調査前 2. 2号墳南周溝部 3. 2号墳4区 4. 2号墳東西トレンチ西部「葺石」



5



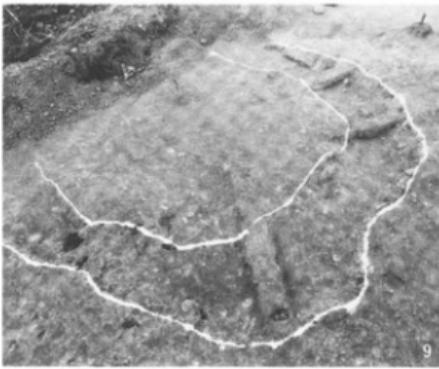
6



8



7

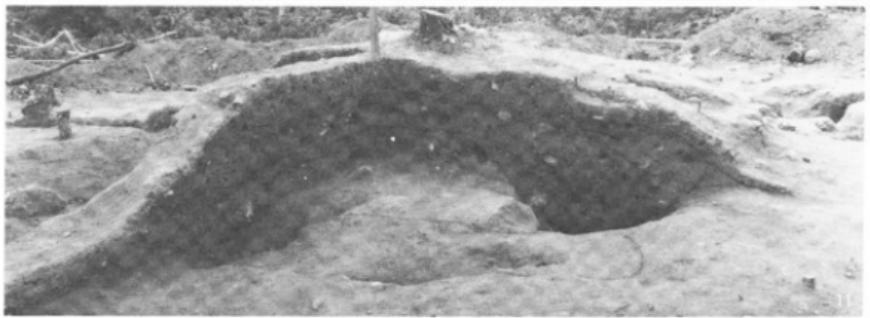


9

5. 2号墳中心主体  
6. 2号墳中心主体  
7. 2号墳周溝内埋葬  
8. 2号墳周溝内埋葬床ピット須恵器出土状況  
9. 5号墳



10



11



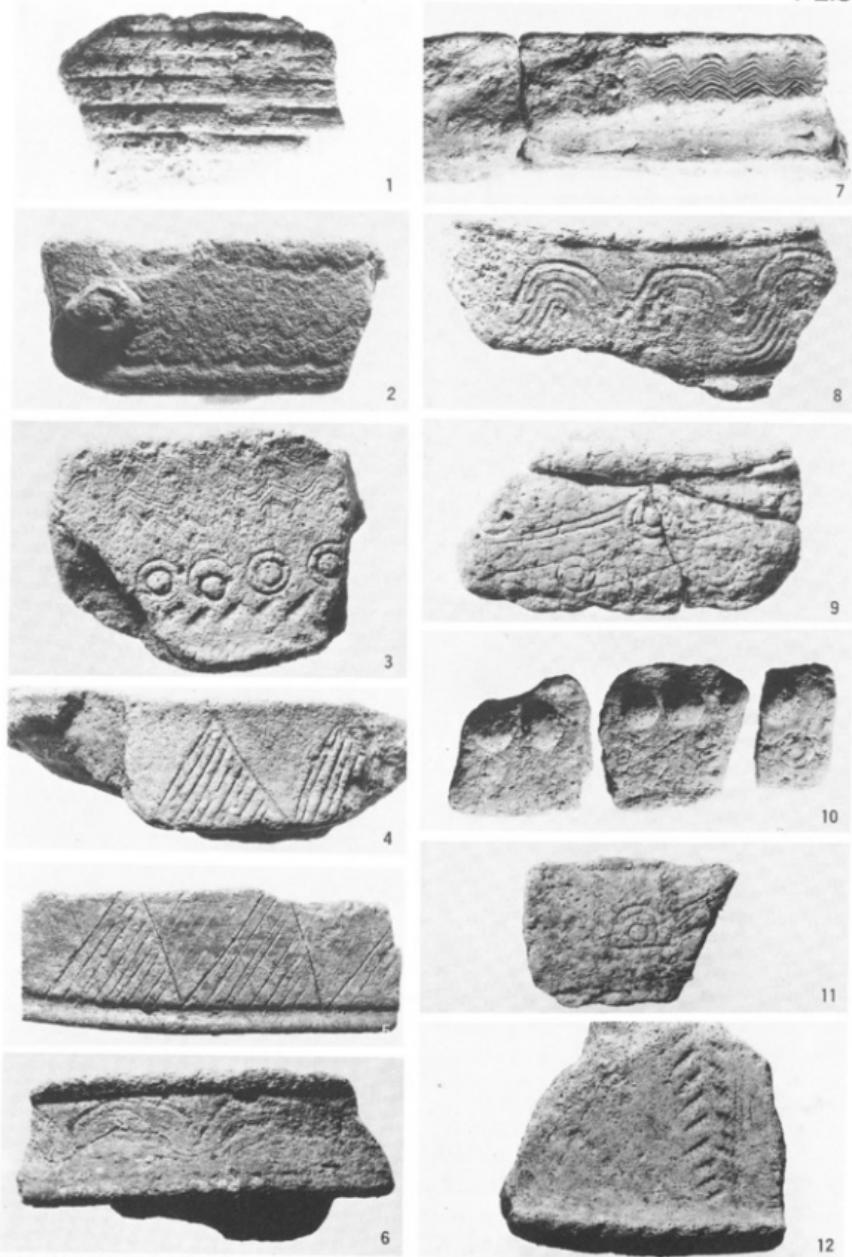
12



10. 長方形台状墓全景 11. 長方形台状墓盛土断面 12. 1号木棺墓 13. 1号木棺墓



14. 6号木棺墓 15. 2号、3号木棺墓  
16. 7号木棺墓 17. 2号、3号木棺墓  
18. 8号木棺墓



長方形台状墓出土弥生土器文様

平行沈線文(縫凹線文)1 波状文2,3,6,7,8 円形浮文2,10 竹管文2,3 列点文3,12 銀齒文4,5

スタンプ文9,10,11

(Fig.18) 1(16), 2(5), 4(8), 5(12), 6(14), 7(4), 8(3), 9(7), 11(7?), 12(11), 3(第1地点), 10(第2地点)



1



3



2



4

弥生台状墓出土土器 1. Fig.18-12 2. Fig.19-34

2号填東周溝部出土土器 3. Fig.10-2 4. Fig.10-3



1



4



2



5



3



6



7



8

2号墳周溝内埋葬出土土器（須恵器）

1. Fig.9-2 2. Fig.9-3 3. Fig.9-1 4. Fig.9-5 5. Fig.9-6 6. Fig.9-4 7. Fig.9-8  
8. Fig.9-9



1



2



3



4

2号墳出土の土器

1. 須恵器 Fig.9-7
2. 土師器 Fig.10-1
3. 勝間田焼 Fig.20-1
4. 土師質环
- 5~7. 土師質小皿



5



6



7

## 才ノ嶠遺跡

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第18集

1985年3月31日

発行 津山市教育委員会  
岡山県津山市山北520

印刷 作州日報印刷  
岡山県津山市皿901-6